

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認雜誌第三五二号
昭和三十三年五月二十五日印刷 昭和三十三年六月一日発行

第二十四卷

第六号

浄土



六月号



最新刊

童話学入門

B 6 360頁 価480円 50円

日本童話協会理事長
駒沢大学文学部講師
東京高等保育学校長

内山憲尚 著

- ◎ 童話学は童話の基礎である。童話を話す人、童話を作る人、子供に話す人、幼稚園、保育所の先生、小学校教諭、日校こども会の指導者、児童教化に携わる人の知っていなければならない基本的なものです。
- ◎ 内山憲尚氏は30年来、童話学の大切なことを叫んで来られ、各大学や講習会等で講演されたり、研究された資料を整理してこの“童話学入門”を出版されました。

新宿区西大久保1-400

発行所 東京文化研究部出版部
取次所 日本童話協会

浄土 六月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
カット 加藤金一 原比呂美

この世の中で……………仁戸田六三郎(2)

よろこびを与えること……………高橋良和(8)

今……………三枝樹正道(14)

時のない夢……………時田時雄(10)

童話はすのはのつゆ……………内山憲尚(28)

中国綺談……………牧尾良海(22)

近代高僧伝……………大橋俊雄(26)

近江の涼景……………鈴木成元(30)

歌壇……………岩野喜久世(39)

庶民と念仏……………一瀬直行(18)

吉田絃二郎先生の
三回忌と遺墨展……………扉の御法語……………(20)

作さざれば食わず……………(32) 会員紹介……………(40)

蓮社を想う……………(13) 会員だより……………(40)

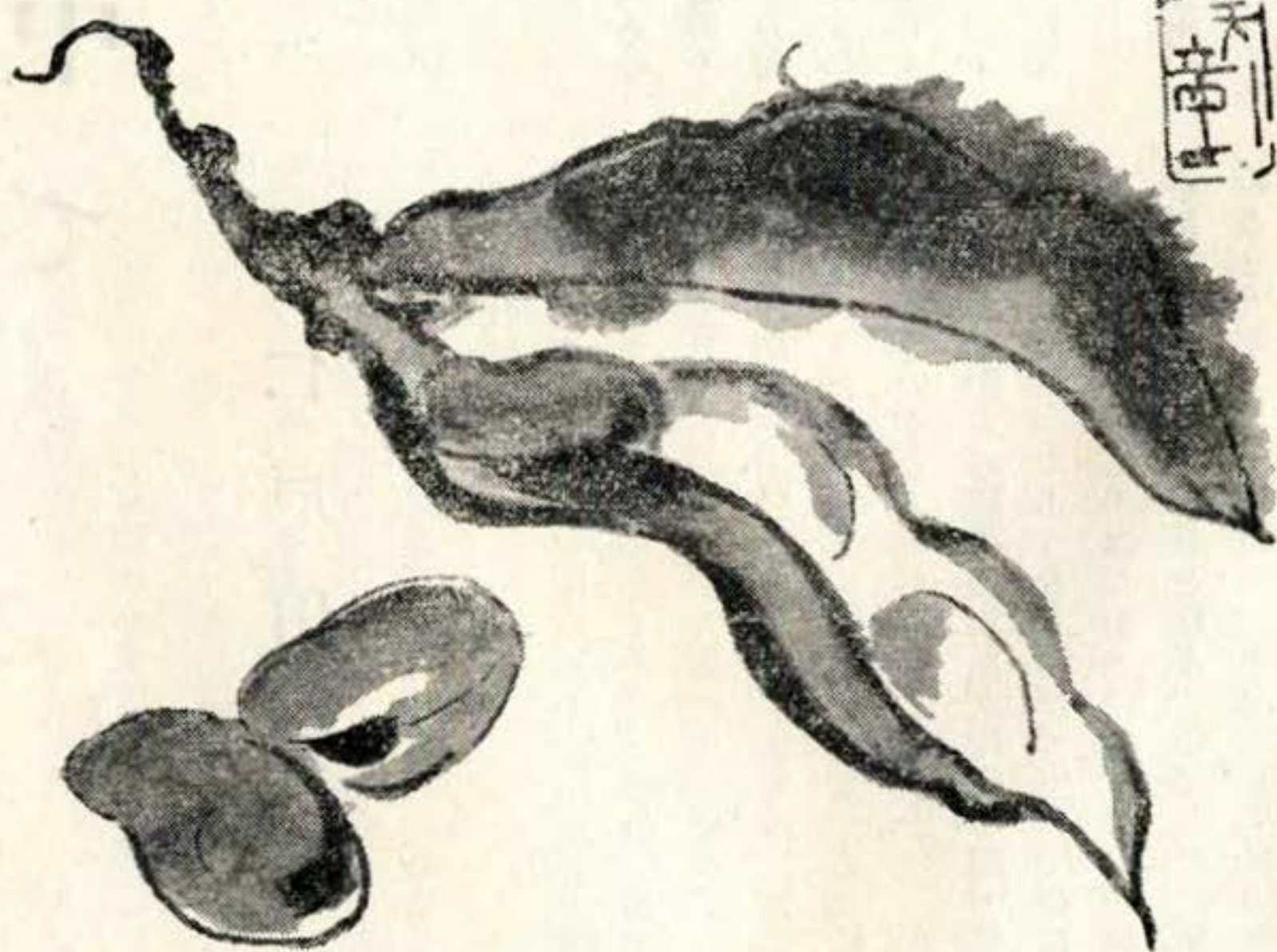
法然上人の言葉(三)……………増谷文雄(34)

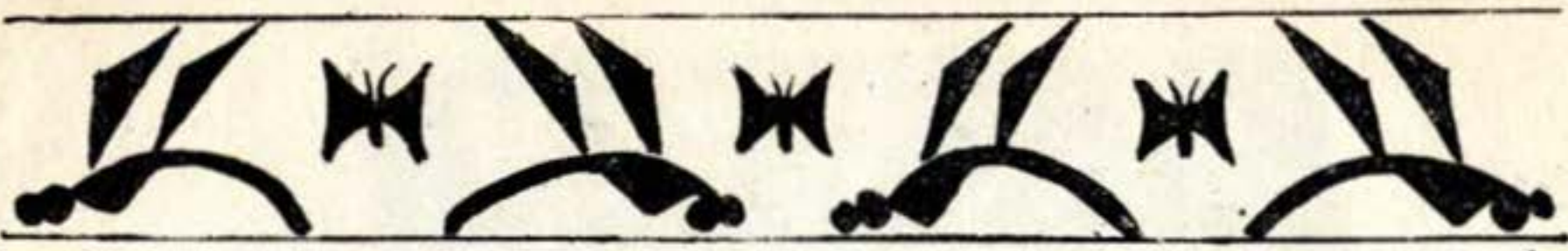
浄土

六月号

それ浄土に往生せんとおもはば、心と行とのふたつ相應すべきなり。かるがゆへに善導の釈に、ただしその行のみあるは、行すなはちひとりにしてまたいたるところなし。ただその願のみあるは、願すなはちむなくして、またいたるところなし。かならず願と行とあひたすけなすところみな剋すといへり。

法然上人御法語





この世の中で

仁戸田六三郎

一

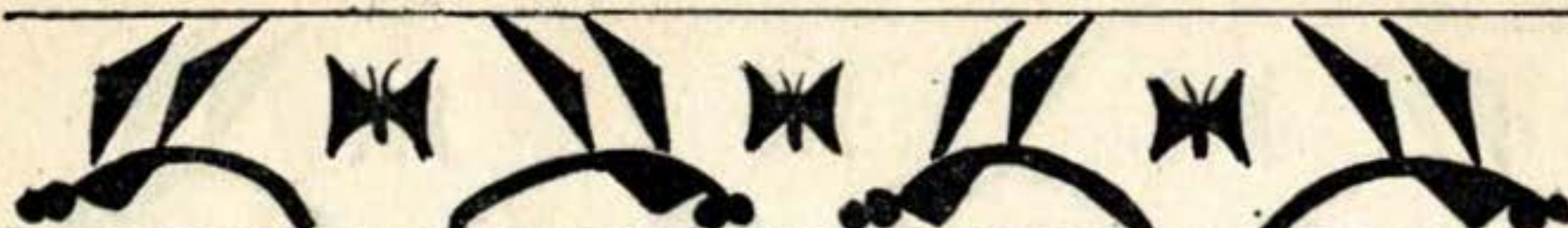
私は御承知の通り中ぶらりんの不徹底な人間であるから不退転の信仰を持つものでもなく不謹慎な言辞を呟して日を送っているものである。従ってこれから書くことも私相応のよしなしごとに過ぎないから浄土の信仰に厚い人々から冷笑されるに相違ない。非常にお粗末な雑文を綴って「浄土」を汚土に変えてしまうかもしれない。あらかじめ御寛恕をお願い申し奉る次第である。

さて、そこはかとなく近頃感じた下品下生の印象の一つを記すならば、現代は誠に結構な時代だということである。法然聖人が御在世の時代は之れに反して大

変な時代であった。

私達は今を去る十三年だか十四年前の大戦ですっかり疲れはてた感がないでもない。戦争中の苦しみを余り身に受けていない若い人達特にハイテーン族は誠に明朗だ。明朗だということは、要するに苦しみを知らないというだけでなく、苦しみに対する対抗力や忍耐力がないということである。

ところが聖人の時代は天災人災交々起って戦争みたいな状態にあったようなものだ。生れてから死ぬ迄平和というようなのはなかったのではないか。鴨長明みたいな人が方丈の菴を結んで穏遁したのも無理からぬことであった。その他太平記でも平家物語でも読むたびに乱世であったことが知られる。こういう時代に



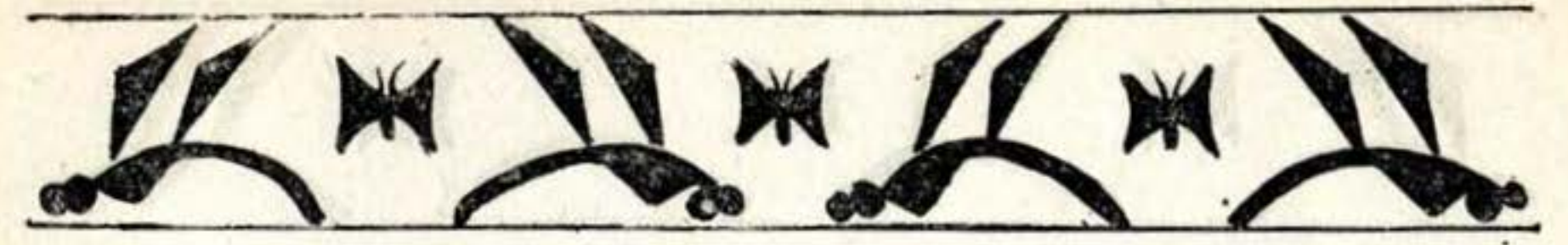
生き抜いた人間は現代のロカビリー族とは大変違うのではないかと思われる。特に法然聖人のようなお方はこういう時代に苦しむ下品下生の人間や悪人を特にお考えになったことは並大抵ではなかったと思う。このような時代は自分自身の安全を計るだけで疲れ果ててしまう。無常迅速とは形而上学的な抽象論ではなく、そのもののツバリの現実であった。

浄土ということは当時の名状すべからざる乱世の中から欣求されたことを忘れてはならない。知らないうちに止む得ず悪人になるか、チャカッリしたエゴイストになるか、刹那的享樂を追う人間になりがちである。デカダンもニヒルも多かつたと思う。その反面ぼけた人間も相当多かつたであろう。さしむき現代人だったら右の何れかになって生ける屍のようになるに相違ない。

こういう状態に置かれて超越的な浄土を考え、これを念仏によって内在化した法然聖人の偉大さは私如きものが今更繰り返すまでもないことだと思う。このことは現実苦に打ちひしがれ押し流されてしまうような多くの凡人や俗人では夢にも考えられないことだ。そこに聖人の浄土三部經に対する甚深な信仰がうかがわ

れるのみならず、そういう信仰の強さが三心を具体化し実践化したことを知るわけである。このような崇高な御人格は一種の理想主義者であるわけだが、普通尋常の理想主義者というものは大体に於て理想の方ばかり眼を向けて現実には背を向けるのが常である。しかし聖人はそうでなかった。聖人は上述の理想を最下最悪の人間に向けられたのである。とかく理想主義者は冷たい。俗人や凡人を馬鹿にする。勿論リアリストよりもアイデアリストの方が崇高だ。中世の動乱期に理想主義者であることは一層困難である。しかし理想主義者であると同時に、その理想を最下最悪の俗人に向けることは至難のことであって古来極めてまれである。

教養ある人々の集る会や何かに出てみると上品でござりかな理想主義者が多い。自尊心過剰で批判精神にみちている。自分の良識と理性を信頼し誇ってるみたいな顔つきである。増上慢も甚しい。このような文化人が突如大地震に見舞われた瞬間を想像してみるがよい。我勝ちに先を争って安全な場所に逃げる有様が手に取るようだ。そしてその顔つきでもある。尤も私の如きは未だ来もしない地震におそれてキョロキョロし



ているからお粗末この上もない次第である。現代の知性人は自分の妻君とか恋人には非知性的な顔をするくせに他人には冷たい文化的で知性的な顔をしている。何事も合理的に割り切って自分が一番偉いみたいだ。その他の人間は胸算ばかりはじくか、愚連隊かズベ公である。或いは社用族かロカビリ族かケセラ族である。

話はあらぬ方に逸脱したかの如くであるが、本稿そのものが既にそういう性格のものだともいえる。

それはそれとして、とにかく選択集を読んでみて私なりに感じることは色々あるが、現代人が聖人のような時代に置かれたとしたらどうだろうと私は考えてもみるのである。何か高いところから声をかけて命令されたり、或いは権力とか制度とかで抜きさしならぬことに追い込まれなければ殆んど人間は自分なりの幸福を夢みながら、強いられた理想主義者になって行くのではないだろうか。それに反して法然の思想と人格は比類ない力強さを感じないではいられない。

二

今度は少し観点を交えて考えてみよう。あのような

時代に浄土思想が高まったということは以上述べたことから言えば並大抵のことではない。法然聖人にしてなし得たことだともいえる。然しながら角度を変えたと如何にも当然であり自然であるとも考えられる。実際色々な本、例えば仏教史や思想史は多くこのような見方をしている。現実が余りにも悲惨で苦悩にみちているから、何か超現実的なものを求めないではいられない。従って往生思想とか浄土思想の起るのは当然だというのである。この点だけから考えると浄土思想は穢土に生きる時代にこそ劇烈に欣求の対象となると考えられる。

ひるがえって現代を考えてみると、平和という言葉が非常に使われていることに気がつくと思う。平和という言葉は或る意味では浄土の一種だとも考えられないこともない。若しそうだとすれば現代人も浄土に憧れているということに相成る。だけれども本質的に言うならば現代人が歌にうたっている平和という概念は断じて浄土であるとは思われない。彼等の主張したり憧れたりする平和という概念の中には非常に虫のいい何かが含まれているように思われる。その一つは彼等は現代自体に対して非常に不遜であるということであ

る。

つまり現代人は現在平和の中にいることをあたかも全く気がつかないでいるようだからである。従って平和は何か別な情況にあるように思っているらしい。若しこのような解釈が誤であるならば私は改めて現代人の憧れている平和というものの実態は如何なるものであるかということの問題にせざるを得ない。それは色々の意味があるだろうが、要するにその一つを挙げるならば戦争のない無事平穩な生活状態を指すのではないか。それならこのような要求はそれと反対な状態にあることから求められているのかといえ、決してそうではない。例えばアルヂエに於けるような状態は今の日本にはない。サルトルはそれに取材した論文を最近書いたことは人の知る通りである。そうすると平和にいて平和を要求するというのが現在の人々の心ではないだろうか。では何故このような謂わば珍無類の平和願望が起って来たのであろうか。

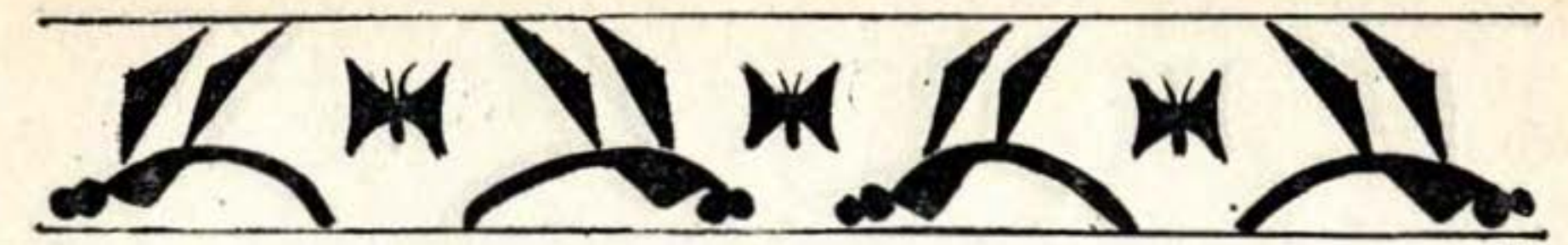
話は簡単である。十三年前の戦争を再び繰り返さないための予防であり、再び戦争が起らないようにする防止運動でもあるようだ。この心情を裏返してみると現在のような平和状態をいつまでも持続させたい心理

である。

このような心理にはおそらく何人も反対するものはない。さつま芋は八百屋の店頭でいねむりをしている。甘いお菓子も結構な酒も自由販売である。青年は兵隊に引っぱられる心配はない。一度こうした自由で平和な生活を味った以上は一日でも一年でも続くことを願うのが人情である。誰だって戦争はいやである。一部の好戦家を除けばみんなそうだろう。

しかし私はこうした現代人の心情を以上とは少し違った角度から考えてみたい。

平和に暮しながら平和を更に要求するという気持は嘗て戦争の苦汁を飲まされたからでもあるが、それが十三年を経るとそれだけの心理ではなくなっているように思われる。つまり少くとも戦乱の真只中から叫ばれる平和要求とは非常に違うということだ。現代人の平和願望の心情の片隅には一種の平凡な享樂主義があるのではないか。そしてこの種の享樂を更に進めるか或いは持続させるかという欲望が現代人の底流に力強く内在しているように思われる。貧乏は大嫌い、愉しかなければいやいやという心理が今日は常識みたいに



なっている。自分自身を苦しめて一層崇高なものに自分を高めるといふような願望は目下はやらない。苦しいことや悲しいことに真面すると自殺をしたり天城山に行ったり、ヤケ酒をあおったり、ノイローゼやストレスで苦しむ。

右のようなチンピラ平和愛好者はその日その日の楽しさを追うか、配給イデオロギーを振り廻すか、何れにしても心の深さは少しもない。週刊誌だけが愛読書であったり、ラジオやテレビを専らたのしむ現代人が如何に多いことであろう。現代のマスコミは高校一年生位の水準だそうだが、これがまた白痴化運動とまで言われているようだ。

テレビとか電気冷蔵庫の有無は現代ではその家庭の文化水準を決定する尺度になってるみたいだ。私の家は従って文化水準は非常に低くテレビも電気冷蔵庫もない。現代人の関心は主としてこのようなものに向けられる。そしてそのためには金が必要になるから金銭を大切にすること大変である。更に現代人の憧れは白ナンバーの自動車である。特に若い男女の自動車熱はロッカビリーの狂乱そのものだ。それらは別にたいして悪いことではない。ただそういう種類のものによる

生活が重要関心事であるために現代人の心が非常にドライになっていることが私には不満なのである。つまりそれでは心の深さというものが少しもないからである。私の如きは全く時代遅れのイカレタ存在であるだろうが、特に若い世代の人々の心が平面的で私は屢々に彼等と話をしていて退屈してしまう。勿論先方も退屈するに相違なからうが、マスコミ以上のセンスを持ち合せていないから、マスコミ関係のジャーナリストになれない。それで何かジャーナリズムの方に紹介してもらいたいと言うのだから、センスのない人間程長生きするものはないと痛感する次第である。それかあらぬか現代人の平均寿命は非常にのびて来たそうだが、これでは長生をするのは当然というべきであろう。

さてこういう時代に法然聖人の思想がどのような役割をはたし得るであろうか。マスコミ的浄土(?)を楽しんでゐる現代人に仏教本来の浄土の真価を知らせるにはどうしたらいいか。九卷伝その他に現われた聖人の言動は当時於ては実に高い鮮度で人々の魂をゆすぶった。お色気でよろめく現代人は弥陀の本願を耳にしてもその方へよろめくことは少いだらう。こんな有様でいる現在でも眼を転じて海の彼方を思えば、最



近西洋に一種の仏教ブームが起りつつあるとか。それは一つには精神衛生の角度からでもあるらしいが、マスコミの本場の人間がマスコミや人工文明にたえられなくなったようでもある。カミユの「ペスト」だかコレラだか知らないが、一面現代に於ける人間存在のはかなさとかくだらなさ、がキリスト教の地盤から痛感されているのは皮肉である。ロッカビリーとかでドタバタやれるうちにはいいが、お粗末な平和中毒患者がたどりつく旅路のはてが思いやられる。現代に於て法然的センスは以上のような状態の中で非常に微妙な在り方で動きつつあるのではないかと私は思うのであるが、それが一層積極的に動くためには常に古く同時に常に新しい鮮度が必要である。

それにつけても私達は色々な中毒から解放されて、法然聖人以来の浄土思想の本質を現代に生かしたいと思う。初めにお断りしたように誠に御粗末至極のたわごとを書き綴りました。御寛恕の程を。

(早大教授・文博)

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額四八〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に、お一人でも多くの会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

よろこびを与えること

高 橋 良 和

日本、いや世界の真珠王といわれる御木本幸吉さんは先年逝ったが、この人の逸話を読んでいると、随分苦勞した人であることがわかった。

真珠王として、あれだけの地盤をつくるまでには苦勞なしですごすことが出来ないことはよくわかるが、その苦勞をした御木本さんが、そのなかでも一ばん心を砕いたのは、人をよろこばすことであつたそうである。

人をよろこばすのにはなみたいの苦勞がいるよ。

と、いつも語っていたらしい。

その一つのはなしにこんなことがある。

今はそうでもないが、戦時中やそれ以前には、国に新らしい大臣が生れると、必ず伊勢神宮に就任奉告参拝に出かけるのが当時の例になっていた。

だから大臣はなによりに先に伊勢神宮に参拝して奉告すると、その道で鳥羽にある御木本さんの真珠養殖場を訪問するのがいつもであつたらしいのである。

すると大臣は御木本さんからあいさつをうけて、

閣下どうぞ私のいけすで、鯛を釣ってください。

と、いわれるので、大臣になったうれしさ

もさることながら、その上に鯛を釣つらうだといわれるので、大臣たるものの冥加のよさをつくづく味った大臣たちはいけすに出かけて、用意された棹をばいと海になげるのである。

するとどうだろうか、またたくうちに水の色が変わるくらい、大鯛、小鯛がこの釣糸の下のエサのところ集つてきて、我れ先にとエサにありつこうとする。そこを見計つて、棹をあげると、目の下、一尺以上の鯛がもの見事に釣れるのである。

につこり笑つた大臣の顔をみながら、御木本さんは、

閣下は大臣に就任なされるし、その上鯛を釣りあげられるし、目出たいの二重でございます、おめでとうございます。

と、いうと大臣はもう顔の紐をといてしまつて、吾が世の春とばかり御満足な様子を示すのである。

そして、あとは座敷に通つて、今釣りあげた鯛をすぐさま、さしみにして、接待するのがつねであつたらしい。

この鯛を釣りあげたときの御木本さんのお

祝いの言葉はどの大臣や、大將がやってきてもいつも同じことばであったというから面白いのである。

御木本さんは、こうしたことについて、自分のところにいる若い人たちにいつもこういつたらしい。

人をおこらすのはすぐだ、けれども人をよろこばすのには準備や、工夫がいる、わしはいつも人をよろこばすことの工夫ばかりをしているのだよ。

と、事実こうして大臣がよろこんで釣りあげる鯛は、凡そ大臣の就任がきまりそうになったときには、いけすに鯛を投げ入れて、数日間も何一つのエサを与えないでおくらしいので、鯛はエサがなくて、ふらふらになつてゐるときに、大臣のなげるエサをみつくて、どの鯛もこの鯛もとびついてくるというのが御木本さんの工夫であつたので、大臣にしてみても、新らしく就任早々の奉告参拝のあとに大きな鯛を釣りあげたなどは、全く縁起のよい話であるから、大臣が目を細くしてよろこんで帰っていくのも無理のないことである。



(故御木本老)

それをみながら大臣に祝辞をのべる御木本さんも、まんざらでもなかっただろうと思うと、人をよろこばして、自分もよろこぶこと、これはなかなかむづかしいものである。

私たちの短いようで、長い一生のうちに、自分でよろこびを得ようという努力はしたがい、悲しみを避けるための苦心をしたことは何十辺となくあるが、人にどうすればよろこびが与えられるかしらと、考えたり、工夫し

たりしたことがあつただろうか、と思うと、いささか淋しい限りで、吾が子や、血族の間には多少そうした計いをみるものがあつても、他人には全くよろこびを与えようなどと考えたこともない筈である。

そう思うと、実際自分のことだけに終始しているのが人間であるといえるので、なんとか他人によろこびを与えられるような心の持ち主になりたいものだと思つづく思うのである。

花や草は詰らない。

手をさしのべて花をみにきてくれとはいわない。然し人には時がくれば花をみるために山に出て行き、遠くへ旅をするのである。

そして美しさに酔い、ふくいくたる香を万喫するのである。

これは花が人々の上によろこびを与える資格があるからである。

そう考えてくると人間も人々によろこびを与える資格をもつように早くなりたいものである。



時のない夢

時 田 時 雄

今日は科学時代。映画も、ミニチュアー・セットをふんだんに使って、さかんに宇宙物を作っている。「地球防衛軍」だとか、火星人と決戦だとか、子供だけでなく、結構おとなにも楽しめるものが作られている。

昔はこういう映画を、「空想映画」といったものである。ところが、今日ではもう空想ではなくなってしまって、現実になってしまった。人工衛星、スプートニクが我々の頭の上をとびつづけているのである。夢が現実になったのである。

ところで、科学が発達して、すべてが現実になれば夢はなくなるだろう。もう、夢や空想に耽っているひまもなくなるのではなからうか。ところが、そうではない。人間という動物は、どんなに進歩し、発展しても、決して夢をすてない。いや、常に、何らかの夢を描いているところに、人間の人間たる特質があるともいえる。それなら、現

代人の描く夢はどんな夢だろう。

私共——といっても、よわい不惑を半ばすぎようとしているところであるが——の子供の時代にも、さかんに、空想映画が作られ、幼き胸をどよめかしつつ、大いに観賞したものである。「ロスト・ワールド」なんというのは、今みても結構楽しめる、トリック映画で、地球上のあるどこかの島に、前世紀の巨大な動物が横行しているさまを描いたものであった。

丁度、そんな頃だった。題名は忘れたが、とに角、今日の人工衛星のようなものが出来て、それで、宇宙旅行をする物語を筋にした映画が出来た。その始めの方のシーンで、いよいよ地球を出発して、段々遠く飛んで行く。逆に、地球の方をみると、大きい丸い地球がぐんぐん小さくなって行く。そのうち、旅行者の一人が、望遠鏡を手にし

て地球をのぞいていたが、突然、おどろきの声を上げたのである。なるほど、おどろくのは無理もない。望遠鏡に写っているものをみていると、すべての働きが逆になっている。野原に、一人の老人が長々と寝そべっている。それが突然ピョンと飛び上ったと思うと、フンワリと馬の背にのっかった。と、馬が急に、後むきに馳け出したのである。そういえば、町を歩いている人は、すべて後向きに歩いており、川の流れは川上に向っている。おどろいたことに、人間を始め、すべての動物は段々若くなり、幼くなり、赤坊になって行く。今まで歩いていたヒヨコは卵のカラにすっぽりと包まれて、動かなくなってしまふ。

これを見ていた、一人の科学者が、こう説明した。

「今や、われわれは、ひかりの速度を追い越したのだ。

だから、前の事が後に、後の事が前にみえるのだ」

これを見ていた私は、子供心にも、何かいい知れないものを感じた。何故なら、もしこれが本当なら、人間は「時間」を征服することが出来るのではないだろうか。

今日も、私共の頭の上を、ジェット機がキューンと音を立てて飛んでいる。その速度は超音速である。だから、ジェット機を見つけるには、音のする方を見ていたのでは駄

目である。そこで、一つのことを考えられる。もし、音というものが、いつまでも消えずにあるとしたならば、そして、ジェット機で、その音の中に飛び込んでいったなら、どういうことになるだろう。蓄音機のレコードを逆にまわした時と、きつと同じになるのではないだろうか。

私共は、もう音を追い越しているのだ。音を征服してしまった。あとに残こされたものは、光を追い越すことである。光を追い越すということは、さっきの空想映画のシーンのように、「時」を征服することになるわけである。もうひと息だ。

これが「現代人」の夢ではないだろうか。時間を征服する。何と素晴らしいことだろう。女の人が一番喜ぶだろう。第一、年をとらなくて済む。何時までも、若く、美しくいられる。男達も決して喜ばぬことはない。借金をしても、返済の日時が来ない。質流れの心配がない。楽しく一杯の酒をのむ、その喜びが永久につづく。時のないということ、何と喜ぶべきことではないだろうか。

今日の人々は、朝から晩まで、時に追われている。時計の針の示すに従って、起きたり、ねたり、働いたり、休んだりしている。それが一切御破算になる。何と自由なことではあるまいか。

何をそんなに喜んでゐる。なに、「時間」を征服したつて。時がなくなつたつて。それがそんなに嬉しいのかね。へん、そんなこと、ちつとも、おかしも嬉しくもありやしないよ。君は、仏教を知らないね。仏教のお経の中に、ちゃんと書いてあるよ。

「時とは謂わく、因果相続流転において、仮立して時となる。」

いってみれば、時なんてものは、本来あるものではなく、色々の出来事のつながりの上に、人間が勝手に、きざみ目をつけたものにすぎない。そして、自分できめたきざみ目にしばられて、自縄自縛になっているのが人間。

だから、そんなきざみ目を取り払ってしまえば、時なんでものは自然消滅。サバサバしたものになるわけである。しかし、ちよつと待て。昔、あるマルキシストのいった言葉が、思い出される。

「極楽というところが、もし本当にあるとしたならば、何とたいくつなことだろう。何故つて、そこには『時間』がないのだからなあ」

なる程、そういわれれば、確かにそうである。仏教では、よく無量寿だの、無量光だのというけれど、本当に、寿命や光明が無量無辺だったら、これは一体、どういうこ

とになるのだろうか。夕食に一杯の盃を傾ける楽しみがあつて、家路を楽しくたどることが出来る。会社や官庁に停年があるからこそ、それまで一生懸命働いて、老後の貯蓄に心がける。母親は、自分の娘が成人して、美しい花嫁姿になる日を指折り数えて待つからこそ、日々のくらしに張りが出る。それが一切御破産になつてしまつたら、人は一体、何を目的に生きて行くことになるだろう。何をすることも、つまらなくなる。生きていくことすら、意味なくなつてしまふではないだろうか。矢張り、生きっぱなしでは駄目である。

やがて死ぬ気色はみえず蟬の声

という句があるが、本当に、夏の木立ちに啼く蟬でも、永遠に啼いているようだが、夏枯れて来れば、どこかえ消え去つてしまふ。これが永久に喋きつづけていたのでは、句にも何にもならぬわけである。

その上、この世は極楽ではない。明日のパンのことが気にかかる娑婆である。ああ、矢張り、時はある方がいいらしい。

夢は美しくあるべし。現代人の夢も、やはり夢であつてこそ美しく、現実になつたのではたまらない。ふと、壁にかかったカレンダーをみれば、ああ、今日は六月十日「時の記念日。」

蓮社（念仏者の結盟）を思う

この春のこと。町内の子供たちと、本栖湖から白糸の滝へバスで巡った販路、大石寺を訪ねてみた。山門をくぐると、塔中十八坊の竝ぶなかを、ゆるい段々になった石畳の参道が、一町近くも続いている。夕暮れ時の曇り空の下、他に参詣者もなく、その道はひっそりと静もりかえっていた。

この閑寂さが、実はこの寺の本姿なのだろう。思うに、日興上人が身延からこの地方に退いたには、多分に隠栖の悲図からと察せられる。少くとも、身延から師日蓮の真骨を奪い重宝を持ち出して、来たなどとは思えぬ。それが真ならば、双方の徒の絶えぬ衆間の巷と化した筈である。これらの訛伝は、恐らくは、日蓮教学の真髓を伝うるは此処ぞとの自負から来た、後世の仮構であろう。お宮の松

や森の石松の墓と同じ伝である。私にはむしろそれは日興を侮辱するように感ぜられた。

しかし、近頃の平常は、蜜にひかれる蟻の群のような学会員の参拝でごったがえすらしい。門前には土産物屋が並び、塔中の諸坊は悉く宿泊休憩所と化して新築され、本堂脇には会館が億余の資を集めて建てられている。末世の希特とでも申そうか。だが、このような殷賑を、はたして開祖日興は喜んでいだろうか。

身延をモヌケのカラといい、板本尊のみが幸福製造機だと説く呪物教の上に空疎な繁栄を誇ろうとする現状は、恐らく日興の素意とは全く正反対なものと想われる。大旦那波木井氏と容れぬ彼が、世をすねて隠栖し、そのために他者と交わらぬ偏狭な宗風を招いたの

は、あわれんでよい。しかしそれが今日の仮構と狂信とを生んだとすれば、正に墮地獄の図と嘆かわれよう。残念な想いに、しばし佇立を禁じ得なかった。

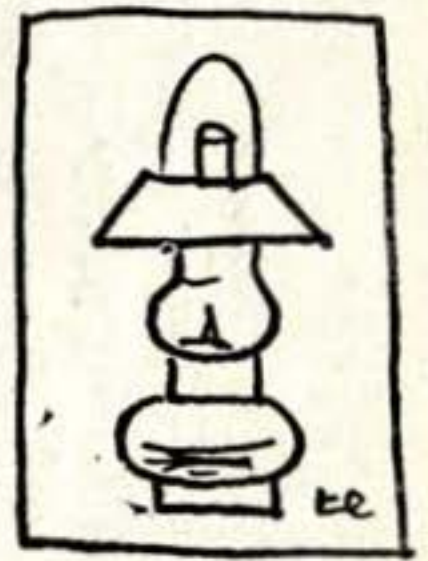
法然上人が南都北嶺の迫害を受けて、門下信徒の面々に群集を警め、没後の廟建設すら禁ぜられた遺誠の中に、私たちは迫害に対する静かな抵抗と烈々たる信火のほとばしりを見るであろう。信火は徒らに狂熱の徒をかり立てる要はない。無理強いな勧誘もいけない。地味でも魂と魂とのふれあいに、永遠の生命を見出してゆけよう。念々刻々念仏による救いの外に光明の生活はあり得ないのがこの世の現実なのだから。そしてこのことを信ずる人々の心と心とのつながり、いわば蓮社の誓いこそどのような強風にもくじけぬ信仰の家を作りあげよう。浄土の友こそは蓮社の人である。

(M)

× × × ×

× × × ×

「今」



三枝樹正道

人身受けがたし、今すでに受く

仏法聞きがたし、今ここに聞く

この身、今生において、度せずんば

更に何れの生においてかこの身を度せん

大衆もろともに

至心に三宝に帰依し奉る。

これは仏教徒として生活する者の、最初の心のおきどころを示したものである。入信の第一歩に、まづ三宝に帰し奉る決心を表明した言葉である。而もこれこそ人間としての生活を始める大切な心構えである。

「人身受けがたし、今すでにうく」

よく考へてみると、自分というものは、人間の身体をしていて、犬でもない。猫でもな

い、魚でもなく、鳥でもなく、正真正銘の人間である。人間の姿をしている。ということとはほんとうに容易なことではない。ありがたいことであると気がついたことである。

人間は生れようとして生れえられるものではない。男子が欲しいと云っても女子が生れ女子が欲しいと思っても男子が生れる場合もある。又子供が欲しい家には子供が生れず、子供の要らぬ家には次々と子供が生れることもある。人の子が生れると云うことは、自由意志で物を作るようなものではない。而も五体そろって生れたと云うことは、真にありがたいことである。と気がついたことである。

更に進んで、私が（他人のことではない）

人格を有している人間であると気がついたことである、時々犬のように喧嘩もし、猫のように怠けもする。又時には牛のように「よだれ」も出して居眠りをしていることもあるが、ほっと気がついて恥かしいことである。自分は人間である、人間がこんなことでは駄目だ、人間は人間としての生活がある筈だと決起することがこの一句の中にひそんでいる尊い意味である。人間である、人格を有しているのであると、気がついて、人間としての活動をせなければならぬと決意してくると、次に

「仏法聞きがたし、今ここに聞く」

と進むことが出来るのである。単なる動物であつては、いかに尊い仏の教も耳には入らない。人であつて始めて仏の教を聞くことが出来るのである。仏法とは真理である。真理とは大自然の道であり、大自然の秩序である。人には人としての道がある。他の動物と異つた道がある。即ち人としての生き方がある。この人としての正しい生き方を仏は教示されたのである。いかに仏が親切慈愛を以て、この尊い教、正しい道をお説きになつても、そ

れを聞く耳を持っていなかったならば到底聞くことが出来ない。猫に小判であり、馬耳に東風である。然しながら今、私は幸に人としての自覚に立ち、人格あるものとして、仏の教、正しい生き方、大自然の道を聞かせて頂くことが出来る身となった、何と尊い、ありがたいことであると、気がついた状態がこの一句の意味である。この自覚に立ってよく考えてみると、今こそ大切な時である。今を置いて何日の日にかこのような機会が又とあるうかと更に一步進めるのが次の句である。

「この身今生において度せずんば

更に何れの生においてか、

この身を度せん」

度せんとは渡るの意味で、苦悩の多い現在の生活を超克して、楽しみの生活、生き甲斐のある生活に進むことである。私は何故に苦悩の多い生活を営んでいるのであろうか、徒らに苦悩そのもののみを眺めて苦悩の中に自ら進んで入って行っておるのではなからうかと、仏の教えによって深く反省させられるのである。仏の教を聞くまでは、何も気づかずに、只苦しい悩ましいと思ってもがいていた

のである。徒らに我欲（それさえも気づかずに）追われて苦悩の道を歩んでいた、苦悩をば誤って楽しみと思い、やがて消えてゆくような淡い当てもならぬ希みを抱いて生きていたのであるが、仏の教を始めて、人間として聞くことが出来た今、現在、深く反省させられて、今までの誤りを知り、目の前に正しい道、大自然の大道が示されて見ると、この正しい、輝しい道を、今にして進み、今直ちに仏の教に従って真っ直ぐに歩んで行かなかったならば、いったい、何日の日にか正しい道を歩むことが出来ようか、恐らく出来ない。而して再び誤りの多い苦悩の世界に生活しなければならぬだろう。大切なことは今である。気のついた今である。仏の教がはつきりとわかった今である。人間の自覚において仏の教を聞くことの出来た今である。

いざ進もう、即ち仏の教えたもう三宝に帰依し奉ろうと決意することである。

「大衆もろともに

三宝に帰依し奉る」

かくして始めて正しい人間の社会が建設されるのである。浄土が建立されるのである。

この今と云う時は、何も別に定った時があるのではない。時々刻々がこの尊い今であり大切な一時である。何時でも、何人にも、何処にもある今である。人はこの今を見逃していることが多い、否殆んど見逃して、大切な時を無駄に費していることが多い。かくしてこの尊い大切な今を忘れて永遠の時間が無駄になり、苦悩で埋められてゆくのである。今、今を真に自覚することが何よりも大切である。

空には人工衛星が飛ぶようになった。昔と時間の觀念も違つて来た。現実の実証世界にあつても、昔は日で数え、時で数えていたのが、現在では秒で数え、秒の何分の幾つと細分して計算する時代となった。東京大阪間を籠で往復した時代から、汽車になり、電車になり飛行機で日販りが出来るようになった現在、瞬間も大切である。私事で恐入るが、私が阪神の尼崎から京都へ毎日往復するに当つても、尼崎で急行に一分の差で乗りおくれると大阪駅では二十分おくれた急行に乗ることになり、これが京都へ着けばラッシュ時であ

って市電が平素なら二十五分で行けるところを四十分もかからねばならぬこととなつて、最初の一分を失うことが僅か二時間の後には三十五分の差がつくことになる。従つてこれを埋めあわそうとするには勢いタクシーを利用することになり、その代金が二百八十円である。すると一分はこれをこの場合金二百八十円で補うことは出来るとしても、その間に失はれた時間は永久に帰らない。古人は「時は金なり」と云つた、確かに時は金である。

金で換算出来る時も考えられる。が然し、その失はれた時は若し充実して生きられていたならば、更に更にどんな高価な生活が出来ていたかも知れないのである。こんなことを考えると実は時は大切である。而もそれは今なのである。今の一時が大切なのである。今の

一時に真に正しい生活が行はれているか、今の一時の私の生活が大自然の大道にすなおに従つておるかどうか、このことが実に大切なことである。

休養は活動の源泉である。休養する時には休養の一時を大切に休養することが必要である。眠る一時も大切である。真に眠れば覚め

た時もハッキリ覚めるのである。一時が大切だと云つて働き通して居るといふのではない。働くべき時に働き、眠るべき時に眠り、休むべき時に休んでこそ、正しい生活である。時を正しく使い、時を正しく過すことこそ、正しい生活である。仏の教えたもう正しい生活とはそのようなものである。この事をすなおに聞き入れて、すなおに実践出来るのが、真の人である。人格ある人と云うのである。

仏の教を聞き、その教に順つて生活して行く者は、現在の今の一瞬を大切にして、まづ正しく生きなければならぬ。その自覚反省を促す言葉が、最初に挙げた、三冊依文の前文である。

世間にはよく、田舎時間だとか、〇〇時間だとか云つて、会合などには一時間も一時間も半も平気でおくれて来る人がある。その為に特に「正〇時集合」とか云つて時間の上に「正」の字を冠する場合もある。正三時も三時も少しも時間には変りはない。同じことである。それに正をつけなければならぬのはその地方の人が時間を守らず時間の大切なことを知らない為である。そんなところからは

正しい生活、喜びの生活は生れて来ない。この今の瞬間の大切なことを知り、その自覚された瞬間を継続してこそ立派な人格者である。仏の教示したもう道、即ち正しい生活を営むことが真の仏教徒の生活である。それは気がついた今を無為に過ぎずに、その今をほんとうに自覚覚醒の生活としてゆくことである。

「人身受けがたし」と気づいて、而も自分は今その人となつて生れておるのである。人格を有する人間である、その人間としての自覚にある私が、容易にすなおに聞けない仏法、即ち真理を、仏のみ教として始めて信じえたのである。この時この際に、このみ教に順つて真理の大道を歩まなくては、又いつこのよな機会に廻り会うことが出来ようか、この今の機会こそ大切な機会である。常にこのように自己を励まし、自己反省して、現在、今をハッキリ見つめて、間違の無い正しい生活を送つてゆきたいものである。これが正しい仏教徒の生活であり、これこそ真の人格ある人間、覚醒した人間の生活である。今を大切に送ろう。

蓮華と泥

一人の比丘が、美しく蓮華の花咲く池のほとりを歩いていった。かくわしい花の香りが、あたりにみちて、思わず、歩みをとどめてその香気をかいでみた。

すると、その池の中から一人の神さまが出て来て、比丘にいった。

「お前は樹下石上に修行する身であるのに、たかが蓮華の香りぐらいに心ひかれて、立止まるとは何ごとか。そんなことでは、今までの修行も無駄になるではないか」

そういって、叱っていると、そこへ一人の男がやって来て、池の中にザブザブ入って行った。そうして、手当たり次第に蓮華を手折ったり、根を掘り起こしたり、乱暴の限りをつくすと、そのままのもいわずに去って行ってしまった。池の神さまは、これを見ていたが、黙って、一言もいわなかった。そこで、今度は比丘がたづねた。

「神さま。あなたは、わたしが、ただ池のほとりにたたづんで、花の香りをかいだ

だけなのに、ひどくお叱りになりました。あの男は、あんなにひどいことをして行きましたのに、何もおっしゃらないのですか。これは一体どうしたわけなのです」

神さまはこれに答えて、申された。

「世間の人間は、いつも罪垢の中にあつて、醜惡の泥に足をつけ、糞尿のけがれを頭につけている。だから、こんな者はとるに足らないものである。しかるに、お前は、清浄な修行に身をゆだねる、稀有の人である。それが、わずかばかりの花の香に心を奪われて修行の道を断ち切ることは、余りにも惜しいことだ。御覧、真白い清浄の布には、一点でもしみがつくと、それが特に目立つものである。きたない、ボロボロには、いくらよれがつこうとも、一向に目立たぬものである。清浄無垢の白衣に、ちりほどの汚点をもつてぬように、一生懸命に修行されて、早く菩提の道を成就されるよう、心がけなさい。」

(雜阿含經より)

吉田絃二郎友の会

一、吉田絃二郎友の会は、先生の芸術を愛好し、先生を追慕する人たちの集りです。

二、吉田絃二郎友の会は、隔月例会を開き、随時会報を発行し種々の催しをいたします。

三、吉田絃二郎友の会は、当分会費を徴収せず、別にむずかしい会則を定めません。

吉田絃二郎友の会

本部

東京都世田谷区玉川瀬田町三九七
電話東京(70)〇一四八

事務所

東京都世田谷区北沢一の一七五
電話東京(42)五四六二番

御入会御希望の方は、おハガキでお申込み下さい。

庶民と念仏

—私の生いたち—



一瀬 直行

本日より四回にわたりまして、庶民と念仏という題のもとにお話してみたいと思います。先ず最初に生いたちから申し上げますと、私は法然上人を元祖さまと仰ぎます浄土宗の瑞泉寺に生れました。そして五十五年の長い間寺に暮して来ました。私の父は十七世の住職となり、私がそのあとをついたこととなります。

私が現在住んでおります土地、つまり浅草からは、これまでに一步も他へうつたことがなく、五十五年の年月を暮して来ました。そんなに長い間、一定の同じ土地に

生活しておりますことは、幸福とも解されるかもしれませんが、立場を変えて云えば、決して幸福な生涯とは云えません。つくずくと私は、生れた土地と自分の一生と

の腐れ縁を思わないではいられません。殊に文学でもやろうという者には、決してよいことではないと、思っております。

私の住んでいる土地は、前方に浅草の繁華街をひかえ、背後には隅田川が流れ、隅田公園がひかえています。そして北側には、もとは山谷の木賃ホテルと云われ、今日ではドヤ街と呼ばれる町がひかえております。そして先月をもちまして姿を消した吉原がひかえております。丁度そうしたものによって取囲まれた真中に、私の町は存在しています。

長い期間のうちには、関東の大地震にもあいましたし、戦争中下町一帯が、つまり本所、深川、浅草が一夜のうちに灰燼と化した三月九日の夜間空襲にもあって来まし

た。震災にも、戦災にもまる裸に焼け出されましたが、その凄惨な点、今次の空襲による戦災は、震災どころの騒ぎではありません。いつも戦災の時を思い出しては、よくも死なないで、生命が助かったものと思う程、近辺の町から軒並びに犠牲者が出ております。

その他子供心にも、吉原の大火や明治四十三年の大水のことを、よくおぼえています。吉原の大火は、直ぐ近くまで焼けましたが、さいわい私の寺は難をのがれました。その時、本堂にはでな身なりをした花魁衆が、大ぜい避難して来、恐怖にふるえていた姿が、今でも浮かんで来ます。明治四十三年の大水の時には、なかなか水がひかないので、本堂に高い床をつくり、寝起

きしていたのをおぼえています。人が舟にのって出入りしていたのを、おぼろげに記憶しております。

私は今日まで、上野浅草の周辺に暮す所謂庶民の人達とは長い年月共に暮して来たと言えます。云わばそこでおきた辛苦を共に体験して来たとも言えます。

よく世間でいうところの下町気質、たとえばものごとにこだわらないで、気性がさっぱりしている。さつくばらんで、あけ放しである単純であって、腹だちっばい。どこか律義で、情味にあついているところがあるなどと、色々にとり沙汰されています。

私はこうした一種の庶民気質を、時によってはひどくいやになったり、又時によっては、馬鹿に気に入ったりして来ました。そう思う自分も、いつか知らぬ間に身に付けてしまつて、そこ



から抜けることが出来ないでいるのかもしれない。

私は五人兄弟の長男に生まれました。父は

思いなかばにして四十代の若さで、早世しました。私事にわたって申訳ないことです。が、私としてもそんなに早く父親にわかれようとは、夢にも思っていませんでした。然かも父の死んだ時は、莫大な借財を背負い、沢山の家族を抱えていました。直ぐさま一家は途方にくれる始末です。

私の父親は子煩悩でしたが、どっちかと云えば馬鹿正直で、融通のきかない頑固親爺でした。日頃私には気持のやさしい父というよりは、おっかないおやじとして思い出します。殊に中学一二年の頃から父はお経をきびしく教えました。毎日のように、一定の時間に、小さな机を挟んで、父と向いあい、阿弥陀経を教え込まれたわけですから。私にはさっぱり意味のわからない。面白おかしくもない、然かもむずかしくて読めない文字のお経を、ただうのみにしてやらんじることにつとめていました。だから、ちつともお経に気が入らないで、外で遊び、騒ぐ友達のことばかりが気になり、うらめしくさえ思っていました。

父の生前中から私は、父のあとについて、本堂に出て、一緒にお経をよみましたし、お檀家にも廻っておりましたが、それがいやで、なるべく父の目にはとまらぬように逃げ廻っていました。

ところが、思いがけない父の夭折によって、さっ速ならいおぼえたお経が役に立たなりました。まるで父は自分の死にを予感していて、いやがる私をつかまえ、お経を教え込んでいたようなものです。その頃の私は、到底一般の少年らしい明るい気分にはなれないで、憂鬱に沈んでいました。

当時の寺庭の子、つまり寺に生れたものは、だいたい親父のあとをついで、寺に入ることを嫌っていました。その頃の少年の気持は、今日とはだいぶ違っています。そこにも時代の変化をみることが出来ます。なにも寺の生活だけに限ったことでなく、どこの家庭でも親父のやっている職業を、子供達は嫌っていた傾向がありました。

その点になりますと、今日の少年達は、

必ずしもそうとばかりはいえませんが、もつと問題をわりきって、先ず食べてゆく生活という観点にしばって、考えています。いくら親父のやっていることが、世の中に役立つ、立派で、自分でもあとをついでゆきたい気持ちがあっても、生活が思うようになり立たないとか、なり立っても、ぶが悪とかしますと、未練げもなく蹴っています。それよりも将来家族を養ってゆくことが出来、生活水準の高い方へ走ってゆきます。一概にもいえないでしょうが、私が育った頃とは違い、それだけ今日の世の中はせち辛くともいえましよう。自然と少年達の考えも違って来るわけです。

先き程、父の生前中から既に寺の生活が、いやでたまらなかつたと申しました。ちよつと考えてもみても下さい。十五六の腕白小僧が、自分だけは白い着物をきせられ、白い足袋をはかされ、その上黒い改良服をきて、首には袈裟をさげ、人中にでも出てゆかなければならないとしたら、どんなに窮屈な思いにおち入ることでしょう。

扉の御法語

常識の上からいって、心と行とは何れが大切ということはないのであって、心と行とは一つことであり、心のない行とか、心だけで行が伴わないものは跛であるのは当然でしょう。しかしこの当然なことが、実に難しいことで、何れか一方が強くなつて、とかくの問題を起すこともよくあります。

御法語に心と行とが相折れるところにすべてに打ちかつことが可能となると強いられるのも、当然のことが、当然に行われ難いからかも知れません。

この御法語は、往生大要抄の初の方に出ている句です。そして心と行とは、聖道門の発心修行がこれであり、浄土宗の安心起行がこれであると申されています。続いて安心について詳しく説明されているのが往生大要抄です。この下巻は現存しませんが、もしあったとしたら起行について詳しい説明がされていることでしょう。つまり

なにもわけもわからぬうちから自分だけは
仏につかえる身となつて、いつも腹にもな
い殊勝な顔をしていなければならぬ。こ
んな馬鹿臭い、不合理な話であるものか
と、真剣に思いつめました。世間の同じ年
頃の少年達が、普通の身なりをして、思
存分に遊び廻る姿をみて、どれ程うらや
ましく思ったかわかりません。

友達はそのような姿をみて、遠慮会釈も
なく、からかいます。軽い冗談だとは、と
れませんでした。変に卑下して、私はにが
笑いを浮かべているわけです。

だが、私としても年がら年中白衣をき、
手には数珠をもつて、殊勝な顔をしてい
たわけではありません。矢張友達と同じよ
うに、学校に通う時には詰襟の学生服をき
ていましたし、遊びに出かける時には、か
すりの着物をきていました。そんな時に
は、全く解放された気持ちになりました。

ですから、私という人間は、白衣をきて
いる時の私と、そうでなく俗服をきてい
る時の私と、そこに二た色の人間、云わばひ
とりの人間が二た筋の違った道を使いわけ

てゆく。そんな真似は出来る筈もなく、又
私の気持が許しません。表と裏を上手に使
い分けてゆく。こんな卑しい欺瞞はないと
思いました。だから、僧服をまとっている
時には、自分自身を偽っているばかりでな
く、世間の目をも偽っていると、深くはじ
入りました。幼い少年の心と、笑ってはい
られない程、本人にとっては、真剣な悩み
でした。

少年の頃は身に僧服をまとっていても、
それにあたいたくないと反省し、はじていま
した。又友達と同じ身なりをして、浅草が
近いところから、よく遊びに出かけました
が、常に白い着物をきた時のことが、忘れ
られずに、こんなことでいいのかと、自責
の念にかられました。一方周囲の顔色ばか
りを卑屈にうかがい、そつと隠れるように
して遊んでばかりいたわけです。要するに
中味の私自身は一つであつても、それを入
れるうつわ、つまり衣装は変っている。こ
んな偽装された生活はないと、訶責にせめ
られ、自己嫌悪におちてゆきました。

(NHK・人生読本放送原稿)

(絵 加藤金一)

心と行とが一体であるということは、三心
行正とが相掛け俱々に進んでゆくところに
往生があるといわれているのです。

安心起行といえは、誰もがすぐ頭に浮ぶ
ものが一枚起請文です。

「浄土宗の安心起行此一紙に至極せり」
という句です。そして一枚起請文の肝心要
のところは

「只一向に念仏すべし」

です。従つて安心起行とはお念仏を申すこ
とに集約されるわけであります。

ところが文字通り愚鈍なわたしに如きも
のは、有難い一枚起請文を拝誦しながら、
ついお念仏を行の方に強くひきがちであ
ります。そこで改めて安心と起行といずれも
同に大切なことという当然なお詞に接する
と、いいしれない自分の愚かさを感じます
しかも御法語の最後の「剋す」の一字を拝
見するとき、尚のこと容易でないことを知
ります。

夢 応 の 鯉 魚



牧 尾 良 海

ていた。

薛偉という人があった。唐の乾元元年に、蜀州青城県の文書課長に任命されたが、助役の鄒滂や警務課長の雷済・裴寮なども、その移動のときの役人仲間であった。

こうして二十日間ほど経ったときに、彼は突然一声ながく呻いたかと思うと、けろつとして床の上に起きなおりながら家の者に訊ねた。

「随分長いこと寝ていた様だったが、一体、幾日ぐらい経たんだろう？」

「もう二十日にもなりますよ。」

家人が答えると、薛偉は、

「誰か、ひとつ走りして、助役や警務課長たちがこれからなますを食べようとして居やしないか、見て来ておくれ。もしそうだったら、この儂がとくに生き返ったからと言うのだ。そうして、大層不思議なことがあるか

ら、暫らく箸をおいて、儂の話を聞きに来るようにと伝えておくれ。」

と言いつけた。そこで、ともかくも下僕を使いに行くと、薛偉の言った通りに、県役所の役人たちが今しも鯉のなますを食べようとしている矢先であった。使いが薛偉の口上を伝えると、皆食事を中止して、早速彼の邸へやって来た。

「みなさんは、戸籍係のこの下男の張弼に言いつけて、魚を買わせたでしよう？」

薛偉が訊くので、助役たちは、

「そうなんだ。」

と答えた。薛偉は、今度は当の張弼に向い、「漁夫の趙幹が、大きな鯉を匿しておいて、

小魚ばかりを渡してくれただろう？お前は、葦のしげみの中に匿してあった大きな魚を見つけ出して、それをぶらさげて帰ったのだ。

お前が丁度役所へ入った時には、戸籍の役人が大門のところまで東向きに坐り、警備の役人が西向きに坐ってて、二人で将棋をさしていた。お前が階段の前まで行くと、鄒滂君と雷済君とがさいころで賭博をやっている最中で裴寮君が桃をかじりながらそれを見ていたん

だ。お前が裴寮君に、

「趙幹の奴、こんなでつかい魚をそつと匿してやがったんですよ。」

とつげ口をしたんで、裴寮君が言いつけて、鞭で趙幹をひっぱたかせたんだ。そのあとでその魚を料理人の王子良に渡し、王子良が鼻唄まじりでその魚を殺したのだ。どうだね、私の言った通りだろう？」

と言った。順々に聞いてゆくと、まさしく薛偉の言う通りだった。そこで、みんな不思議がって、

「あんたはどうしてそんなことをいちいち知っているのだ？」

と尋ねると、薛偉は、

「ついさっき、殺されたあの鯉というのは、実はこの私だったんだよ。」

と言うのである。みんなが驚いてその訳を尋ねると、薛偉は次の様な奇怪な話をし始めた。「私は、始め病気になるたびに、身体中の熱がひどくて、どうにも我慢ができなかった。ところが、急にくらくらとして、昏酔状態のようになったかと思うと、自分が病気だということ忘れてしまったのだ。唯もう熱

くて熱くて仕様がなかったので、少し涼んで来ようと思い、杖をついて外へ出て行つたのだ。

それが夢の中だということには気がつかなかったのだ。やがて県城の外へ出ると、気持も大層愉しくなつて来て、まるで籠の中の鳥や檻の獣が自由に解放された様な・のびのびとした気持であつた。誰も私には気付かない様だった。段々と山の中へ入って行つたのだが山中を歩くにつれてますます息苦しくなる一方だったので、今度は山を下つて、とある河の岸边へ出てみた。河の水は深く・澄みきつてゐるし、遠近の秋色は形容もできぬほど美しかった。水面の上にはさざなみひとつ立たないで、まるで一面の明鏡そのものだった。そのうちに、急に泳いでみたくなつたので、着物を脱いで岸におき、ざぶんとばかりに河の中へ飛びこんだ。もともと私は、小さい時分から水には馴れていたのだが、成人してからは、水にさっぱり縁が無かつた。今、ここですこし思う存分泳げるというのは、かねての念願が叶つたというものだ。私はそこら中を泳ぎまわりながら、こう呟いた。

「人間は、水の中をこうして泳ぐのだが、魚

たちが楽しげに泳いでいるのとは比ぶべくもない。何とか、少しの間でもいいから、魚の様になつて、すいすいと自由に泳いでみたいものだなあ。」

ところが、私のすぐそばにいた一尾の魚がこう言った、

「そりゃあ貴方が、そうなりたいと御自分で願わないから駄目なんです。貴方がもし正式に魚になつてみたいとお思いになるんでしたら、いとも簡単にできることで、一寸の間でもいいからなどと、自分で区切る必要はありませんよ。何とかして私が貴方の為の良い方法を考えてあげましょう。」

そう言い終るが早い、その魚は早速何処かへ泳ぎ去つた。間もなく、頭の恰好は魚類だが、身体つきは人間の形をした・背のたけ二三尺ぐらいの一人物が、鯨にのつて先頭に立ち、後には数十尾の魚族を従えて現われた。その人は、水神である河伯の神の詔書を持つて来て、私の面前で読み上げた。

城裏にある者、水中に遊泳する者、或いは浮びて上にあり、或いは沈んで下にあ

鵜飼大俊伝

尾陽の産んだ浄土宗の僧は、越前と共に可成り多い。そして史上に徳僧と仰がれ、学僧と尊ばれる名僧も亦、数限りなく輩出しているが、傑僧と呼ばれ得る僧は極めて少ない。少ない中の一人が大俊であった。

漂渺として果てしなくつづく濃尾平野の一角―尾張国中島郡片原一色村の寒村に、大俊が農民鵜飼莊右衛門の次男として生れたのは弘化三年（一八四六）八月四日のことであった。幼名は岩次郎。彼は幼少の頃から頭がよくて、読書を好み、古今の英雄の伝記を読んで血をたぎらせ、逸話を聞いて心に出世を夢みたのであった。しかも、理屈やで、議論をたたかわせ、人を驚かしたことも屢々であった。だが農民に学問は不要である。好学の念

のさかんなことを知った叔父の説庵は、岩次郎をすすめて弟子とし、名を大俊と授けた。説庵は片原一色善応寺の住職で、「一人出家すれば九族天に生る」という仏教信仰の厚い土地であっただけに、岩次郎の出家は、両親をどの位喜ばせたことであつたらうか。

以来、厳しい僧院での修行生活を送つて後、笈を負うて江戸に下り、増上寺の密雲寮という学寮で、宗乗を学んだが、彼の勉強ぶり、人々をおどろかせた。学問も大いに進み、「一文字席」になつたとさえいわれる。一文字というのは、檀林における階級で、一大衆の上座である老齢に次いで、大衆を指南する役であつたから、増上寺学寮における大俊の地位は可成り高いものであつたらう。

しかし彼の学問は学寮に於て学んだ仏教や宗乗のみにとどまらず、広く江戸在住の名士と交わつて、深く、広い知識を身につけることが理想であり、安井息軒とも交友があつたらしい。

時が移り、江戸も末つ方となると、勤王、討幕攘夷という動きが活潑となり、薩長の功によつて江戸幕府がたおれ、明治の新政が新しい構想のもとに開かれようとしても、新政に心よからぬものをもっていた人の中には、幕府の再起をはかろうと、真剣に考えていた者もないわけではなかつた。大俊もその一人であつた。彼は、米沢藩の儒者であつた中川雪堂と交わりをもっていた関係で、同志として雲井竜雄を知るに至つた。それより以後、時ある毎に大俊と竜雄は意気投合して、時事を論談し、悲憤慷慨、復古を策したが、計画成るに及んで、兵をつのるため、竜雄と別れて東海道を下つたのは、明治三年（一八七〇）春であつた。韮山衣州は「浮屠憂国者前有月照、後有大俊、雖其所主不同亦奇人物也」と讃え、竜雄は壮途を祝して「送釈俊師」と題

する、次のような詩を送った、

君今去向東海道 到处山河感多少

荒城殘暈趙耶韓 勝敗有跡猶可討

駿之山分參之水 英雄起處地形好

知君至此氣慨然

こうして、大俊は一路東海道を下り、三河・尾張から伊勢路に入つて、同志をつのつたが、まだ目的をとげないうちに、竜雄の計画はもれて、捕われの身となり、大俊も官憲のために、四日市の光運寺で捕われ、名古屋藩獄に送られた。ここから更に軍鶏籠に入れられて、東海道を江戸へと護送され、その罪を問われ、三年の刑に処せられたのは十二月も半ばの頃であつた。ここに於て彼は非常に前非を悔い、獄規をよく守り、刑期三年をつとめ服した。明治六年、刑満ちて佃島の獄舎から、増上寺山内の密雲寮に帰るや、直ちに大教院の神官僧侶の試験に応じ、中講義となり、一山の僧衆を驚かしたということであるが、翌七年には大講義に進んだ。時に二十九歳であつた。彼より十五歳としうえで、後の

知恩院門跡で、百三歳の天寿を全うした山下現有が、大講義となつたのが、四十六歳の明治十年十一月のことであつたことを思うと、その出世振りのはやさに驚くばかりである。

大俊が和光室に住して、第三世の法燈をついだのは、明治七年の頃であつたらしい。この年、仏教の報導機関として新聞の発行を鴻春院・宏仏海・大内青巒・佐久間貞一等とはかり、仏教書林明教を創立して、七月から「明教新誌」を隔日に発行することになった。これは仏教新聞の嚆矢となり、以来、その年の暮には「美濃教義新聞」が、続いて八年に入り佐田介石が「世益新聞」を発行して、仏教界の動きが刻々と新鮮な記事として知らされることになった。

しかし、前途有為な活動的手腕を十分そなえ、将来を囑望せられていた大俊も、無理がたたり、病魔にはうちかつことができず、同十年ごろから増上寺山内の和光室で病床に臥すことになった。翌十一年に入り、もはや再び起つことのできないことを知るや、詩文を介して、常に交遊していた同郷の先輩で、常

に畏敬していた山下現有を招いて往生の業を策励すると共に、ひたすら念仏をとなえて止むことがなかったということである。そして一月十五日には命終に臨み

三十余年夢惡真 吟哦風雪月花春

一朝夢覺忽歸去 十萬億程駕願輪

の辞世の詩をのこし、三十三歳の若さで世を去つた。法名は法蓮社性誓上人円阿実証大俊和尚。一に晋如と号し、亦碧窓とも言われた。尚、現有は大俊の生前からの希望によつて、臨終の善知識をもつとめ、安らげく往生せしめられたのであつたが、寂するに及んで現有は

悼大俊上人次韻

一覽無生百事真 取迷夢境幻花春

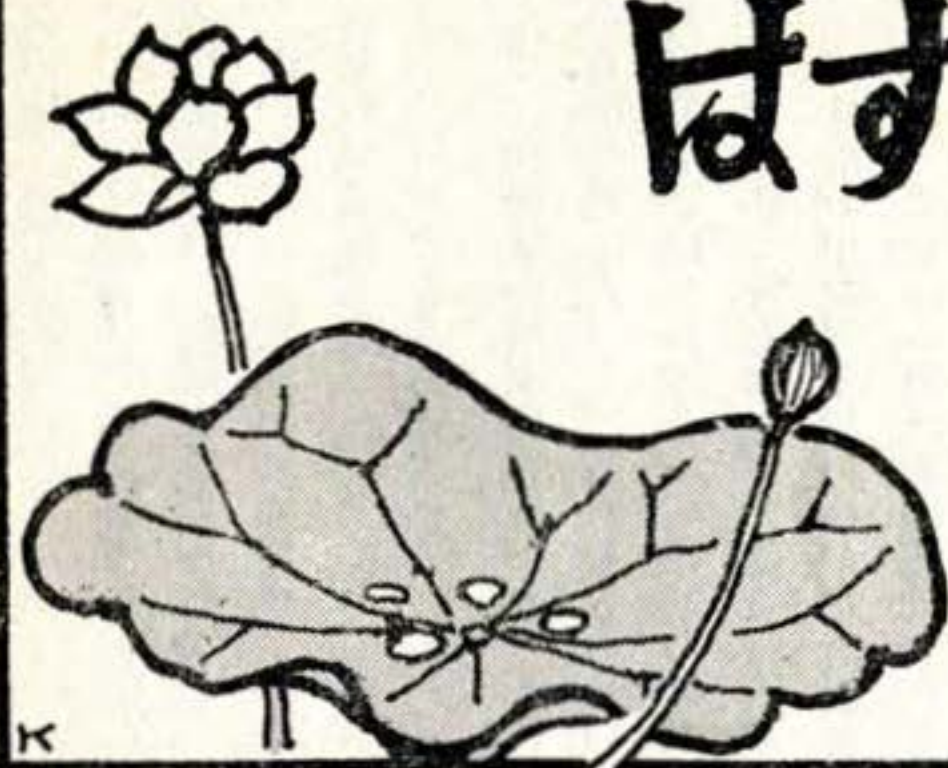
何時我亦登蓮坐 歡喜瞻君転法輪

をはじめ、幾つかの詩をものし、懇情あふれ、師を悼む数々の次韻をのこし、その徳を慕っている。

(大橋 俊雄)

はすのはつゆ

内山 憲尚



すがすがしい、なつのはじめの朝でした。お寺の前のはす池にも美しいお日様がキラキラ照っていました。

朝つゆがおちてたまつたのでしょうか、はすの葉の真中に一つのきれいなつゆの玉が、ちようど水晶のようにかがやいています。

「きれいな水晶の玉だな……」

てんと虫が見つけた。

「ほんとうだ、光っているよ……」

そこへとんできた蜂がいました。

「すばらしい飾りものの玉だ、たいしたものだ……」

大きな声でどなるように叫んだのは、目だまの大きいとんぼでした。

てんと虫は、はすの葉の先にとまりました

「僕が一番初めに見つけたんだから、この水晶玉は僕のものだよ……」

蜂もはすの葉の先にとまりました。

「僕だよ、見つけたのは、だから、この美しい玉は僕のものだよ」

とんぼもまけていません。

「飾りものの玉は僕が見つけたんだよ」

てんと虫と、蜂と、とんぼは、はすの葉の

先にとまって、お互に自分のものだといひました。

「僕が見つけたんだよ……」

「僕だよ……」

「ちがうよ……僕がもらうんだ……」

蜂がいました。

「そんなら、このはすの葉の上で、力くらべをして、勝ったものが、この玉をもらうことにしよう」

「よーし……お相模ならまけないぞ……」

てんと虫は、りきみかえって申しました。

「一、二の三！」

三匹は大きいはすの葉の上で、つかみ合いがはじまりました。美しいつゆの玉は、はすの葉がゆれるたびに、ゆらゆらゆれて、今にもはすの葉の上から落ちそうになりました。

そこへ、蝶がひらひらととんできました。

「みなさん、どうしたんですか……そんなところで、つかみ合いなんかして……」

「蝶さん、僕が見つけたから、この水晶の玉は僕のものだと言うのにみんなきかないんです。」

「ちがうよ、僕のものだよ……」

「そんなに、みなさんで葉の上で、あばれると、美しいつゆの玉が、水の中へ落ちてしまふじゃありませんか……みんな仲よくしてそのつゆの玉を、みんなでながめ、みんなでおいしくいただければよいじゃありませんか……」

「だって僕が一番初めに見つけたから、僕のものにきまっているんだよ」

「ちがうよ、僕のものだよ……」

「僕んだよ！」

又三匹でつかみ合いが始まりました。

「なにお……」

「よーし……」

はすの葉は、右左に大きくゆれました。

はすの葉のつゆの玉はゆらゆらと、葉の上を、ころがりまわりました。そのうちにとつくみ合いがだんだんはげしくなってきた、葉のゆれ方がひどくなったかと思ううちに、ころころと葉の上をころがっていた、つゆの玉は葉の外の方へころがって行って池の中へ、ぽとんと落ちてしまいました。

「あ、水晶の玉が落ちた」

「光っていたのがなくなった」

「美しい飾りものが……」

三匹ははすの葉の上へ、べったりと腰をおろして、気がぬけてがっかりしてしまいました。

「蝶さんの言うことを聞いて、けんかなんかしなければよかった」

「蝶さんの言った通りだ」

「なんにもならなかったね」

蝶はやさしく申しました。

「つまらない争は一番いけないことです。いつもみんなで仲よくしてゆけば、たのしい世の中になるのです。はすの葉の上のつゆのようなきれいな心をもちましよう。はすの花のようなきよらかな、やさしい心をもつようにいたしましょう」

「そうだ、僕が悪かつ

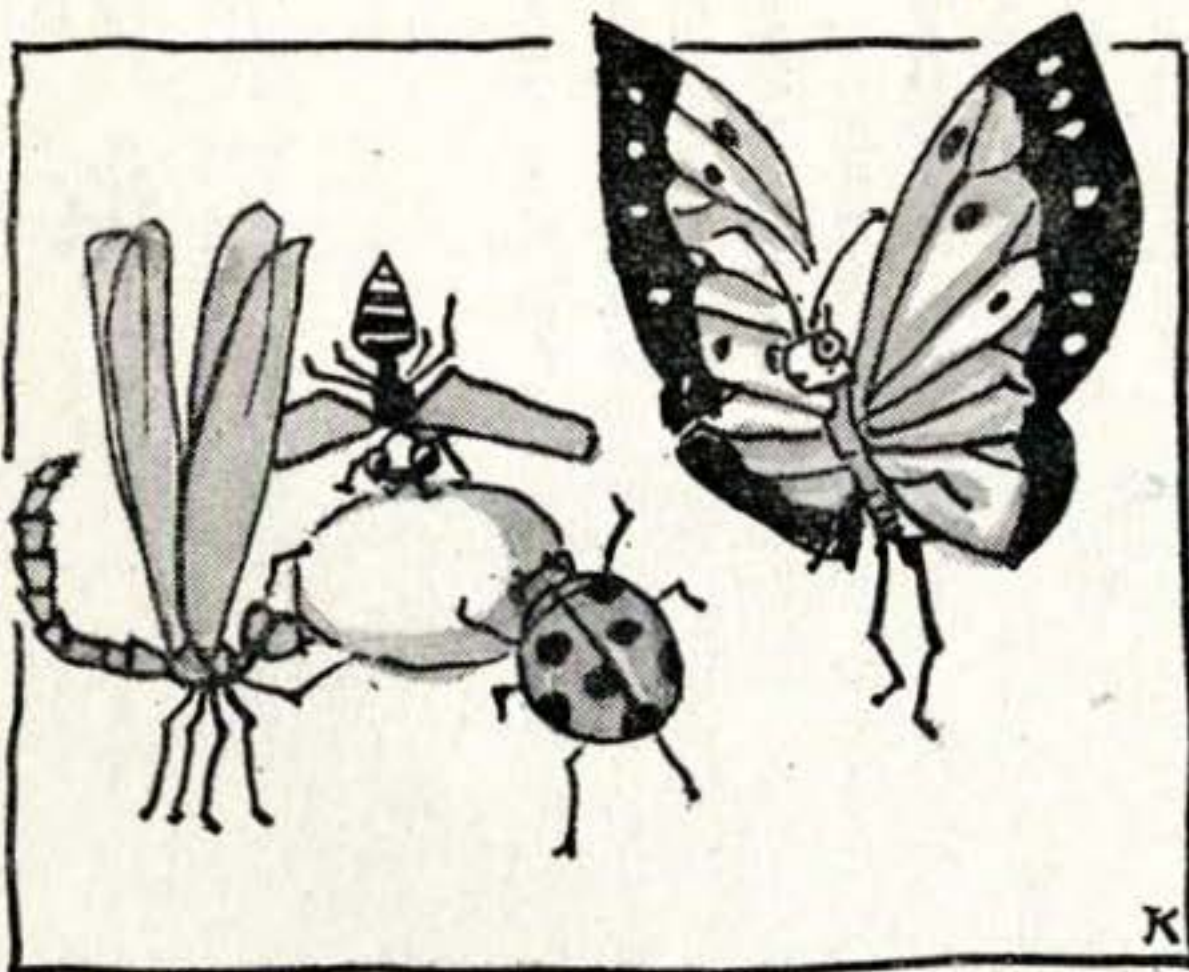
たのだ、ごめんよ」

「いや、僕がいけなかったんだ……」

「僕が、わがままだったんだよ、ゆるしてね」

「じゃみんなで仲よく、たのしく遊びましよう」

蝶を中心にして、てんと虫と蜂ととんぼはそれから仲のよい友達になって、たのしくくらしました。



(画・加藤金一)

近江の涼景

—金勝の阿弥陀寺—

鈴木成元



(阿弥陀寺山門)

私が近江に遊んだのは一昨年の夏である。草津から交通博物館陳列級のバスに揺られて三十余分、金勝^{こんせ}に着いたのは昼下がりであった。歌にある「田舎のバス」などというのんびりしたものではなく、当今流行の神風バスで、降りた時は安心感というか開放感というか、救われたという気持で一杯であり、急に猛暑を感じた。ここから目的地の阿弥陀寺まではしばらく歩かなければならない。話には

聞いていたが、当地の夏は実に暑い。けれども目新しい近江の山々と山道に平行する小川の潺湲^{せせらぎ}は、暑さと疲れを十分に休めてくれ、散在する人家に比して寺院の多いのには驚いた。それも大抵は二三カ寺一所にある。こんな片田舎に寺町でもあるまいなどと考えている間に東坂に着いた。ここは道の両側に少しく家が並び、商店も一二ある、いわば東坂銀座といわれるところであろう。金貨・銀貨を作る場所であるから銀座・銀座といったのであるが、近頃は何処にでも銀座があり、全く滑稽なことである。いやそれを誇らしげにしているのであるから頭の程が窺われる。現代的な銀座の意は最早歴史的な意味はなく繁華街に変わってしまった。しかし銀よりは金の方がよいに決っている。前例がないのではある

まいし何故選り好んで銀座を愛用するのであろうか。現代は何でもゴールデンとかデラックスの流行時代であり、一人位型破りの者が出て〇〇銀座といえば、或はヒットするかも知れない。そうすればここを東坂銀座といってもよいわけである。

それはともかくとして間もなく右手に古びた山門が見えた。一目で目的地の阿弥陀寺であることがわかった。何の飾もないこの棟門は、まるで新薬師寺東門や伝光寺表門を見ているような錯覚を起し、暑さも一瞬にして飛んでしまった。というのは古い建築様式をそのまま伝えている珍らしい門であり、朽ち墓股にも欠けて雑草の生えた屋根瓦の一つ一つにも表現することの出来ない何物かを感じ、そっと私に歴史を物語ってくれるかのようで

あった。時折大きな口を開けたままポカーンとしていた自分を思い出すにつけ、自笑せざるを得ないのである。

山内を潜ると右手は高い土手で左手は竹藪になっており、苔むした石段にかぶさる五六本の竹が、峯の松風に靡いて立てる軽いハー—モニーは、一層の涼味をそそいでくれた。

長い石段が右に折れて突き当たったところは白壁に囲れた中門で、宗源寺の四脚門と瓜二つである。実に軽快で、屋根も瓦葺ではあるが重いところがなく、味のある反りを見せている。塗って間もない周囲の白壁は、この門を一層引き立たせている、それは小さな城郭を思わせ、何故かチクツと胸を刺すものがある。ふと我に返った途端、門前に現れた光景は再び私を夢の世界へと導いた。一面の苔庭には小さな松樹が散在し、舞台セットのような本堂がくつきりと浮んだからである。強い夏の光を浴びて醸し出すコントラストは全くこの世のものとは思われない。山門から本堂までの短いコースに如何程の時を費したことであろう。

この寺は応永二十(一四一三)年に隆堯法

印が作った寺で、室町時代における念仏布教の根本道場であった。この寺には今に次のような伝説が残っている。

当地は非常に水の不便な土地でとても人間の住める土地ではなかった。けれども法印がこの地に来て如意を落したら清水が湧き出した。そこでこの地に庵を作った。

この話は歴史的にはそのまま納得しかねるが、今でも隆堯泉或は如意水といわれて竹藪の中に残っている。すなわち二尺平方位の大きさに石垣が積まれ清水が流出しているが、現在の本堂や庫裡からは離れていて何にも使用されていない。

阿弥陀寺に関する伝説は色々あるけれども、その骨格をなすものはこの隆堯泉であり、これがもとになって展開されるのである。そこで私もこの泉に非常なる興味を持ったのである。ところが中門の外より緑まばゆい苔を一見し暫は我を忘れていたが、その落胆は大きかった。

一体この辺の土地は地下水が高いので

割合湿気が多くじめ／＼している。庭から墓地にかけて美しく生いている苔・松の色・或はまた松茸の名産地という事実を考えただけでもそれは明かである。地質などは特別の大きい。まして当地方は地下水が高いから少し掘れば水が出て来ることは明である。それをこ



(阿弥陀寺本堂)

近江の涼景

—金勝の阿弥陀寺—

鈴本成元



(阿弥陀寺山門)

私が近江に遊んだのは一昨年の夏である。草津から交通博物館陳列級のバスに揺られて三十余分、金勝^{こんせ}に着いたのは昼下がりであった。歌にある「田舎のバス」などというのんびりしたものではなく、当今流行の神風バスで、降りた時は安心感というか開放感というか、救われたという気持で一杯であり、急に猛暑を感じた。ここから目的地の阿弥陀寺まではしばらく歩かなければならない。話には

聞いていたが、当地の夏は実に暑い。けれども目新らしい近江の山々と山道に平行する小川の潺湲^{せせりぎ}は、暑さと疲れを十分に休めてくれ、散在する人家に比して寺院の多いのには驚いた。それも大抵は二三カ寺一所にある。こんな片田舎に寺町でもあるまいなどと考えている間に東坂に着いた。ここは道の両側に少しく家が並び、商店も一二ある、いわば東坂銀座といわれるところであろう。金貨・銀貨を作る場所であるから金座・銀座といったのであるが、近頃は何処にでも銀座があり、全く滑稽なことである。いやそれを誇らしげにしているのであるから頭の程が窺われる。現代的な銀座の意は最早歴史的な意味はなく繁華街に変わってしまった。しかし銀よりは金の方がよいに決っている。前例がないのではある

まいし何故選り好んで銀座を愛用するのであろうか。現代は何でもゴールデンとかデラックスの流行時代であり、一人位型破りの者が出て〇〇金座といえ、或はヒットするかも知れない。そうすればここを東坂金座といってもよいわけである。

それはともかくとして間もなく右手に古びた山門が見えた。一目で目的地の阿弥陀寺であることがわかった。何の飾もないこの棟門は、まるで新薬師寺東門や伝光寺表門を見ているような錯覚を起し、暑さも一瞬にして飛んでしまった。というのは古い建築様式をそのまま伝えている珍らしい門であり、朽ち墓股にも欠けて雑草の生えた屋根瓦の一つ一つにも表現することの出来ない何物かを感じ、そっと私に歴史を物語ってくれるかのようで

あった。時折大きな口を開けたままボカーンとしていた自分を思い出すにつけ、自笑せざるを得ないのである。

山内を潜ると右手は高い土手で左手は竹藪になっており、苔むした石段にかぶさる五六本の竹が、峯の松風に靡いて立てる軽いハーモニーは、一層の涼味をそそいでくれた。

長い石段が右に折れて突き当たったところは白壁に囲れた中門で、宗源寺の四脚門と瓜二つである。実に軽快で、屋根も瓦葺ではあるが重いところがなく、味のある反りを見せている。塗って間もない周囲の白壁は、この門を一層引き立たせている、それは小さな城郭を思わせ、何故かチクツと胸を刺すものがある。ふと我に返った途端、門前に現れた光景は再び私を夢の世界へと導いた。一面の苔庭には小さな松樹が散在し、舞台セットのような本堂がくつきりと浮んだからである。強い夏の光を浴びて醸し出すコントラストは全くこの世のものとは思われない。山門から本堂までの短いコースに如何程の時を費したことであろう。

この寺は応永二十(一四一三)年に隆堯法

印が作った寺で、室町時代における念仏布教の根本道場であった。この寺には今に次のような伝説が残っている。

当地は非常に水の不便な土地でとても人間の住める土地ではなかった。けれども法印がこの地に来て如意を落したら清水が湧き出した。そこでこの地に庵を作った。

この話は歴史的にはそのまま納得しかねるが、今でも隆堯泉或は如意水といわれて竹藪の中に残っている。すなわち二尺平方位の大きさに石垣が積まれ清水が流出しているが、現在の本堂や庫裡からは離れていて何にも使用されていない。

阿弥陀寺に関する伝説は色々あるけれども、その骨格をなすものはこの隆堯泉であり、これがもとになって展開されるのである。そこで私もこの泉に非常なる興味を持ったのである。ところが中門の外より緑まばゆい苔を一見し暫は我を忘れていたが、その落胆は大きかった。

一体この辺の土地は地下水が高いので

割合湿気が多くじめ／＼している。庭から墓地にかけて美しく生えている苔・松の色・或はまた松茸の名産地という事実を考えただけでもそれは明かである。地質などは特別の大異変でもない限りそうそう変るものではない。まして当地方は地下水が高いから少し掘れば水が出て来ることは明である。それをこ



(阿弥陀寺本堂)

作さざれば食わず

唐の百丈大智禪師は九十歳にもなろうという老齢に及びながら、なお、五百人の雲水と一緒に、作務（禪宗の寺院生活で行う色々の雑事）弟子達は禪師の老齢をいたわって、おやめ下さいと何度かたのんだが、禪師は一向にやめようとしなない。そこで、一同は相談して、作務のとき大智禪師が使用される箒をかくしてしまった。これにはさすがの禪師も作務することが出来ず、そのまま方丈（部屋）に引込んでしまわれた。さて、食事の時間が来た。ところが、禪師は一向に出て来ない。弟子が行って「何故おいでにならぬのですか」ときくと、

「今日は作務をしなかったから、わしは食事を頂かぬ。一日なさざれば一日食わず」

こう答えて、到頭その日一日食事をされなかった。爾来、弟子達は禪師の作務をとめようとはしなかった。

のように表現したのは、開山隆堯法印の徳高をいったものである。そう考えて来ると先述の落胆もいつしか希望に変わり、本堂から庫裡の方へと足は向いて行った。

本堂は二回火事に会って元和二（一六一六）年に建立され、当地の他寺院と変りないが、正面にかかっている阿弥陀寺の額は、慶長二（一五九七）年に後陽成天皇より賜ったもので、昔日の面影を僅かに伝えている。

庫裡は本堂の裏側で面白い造りになっている。というのは真中が通路になっており、一つ棟で座敷と土間に分れた東北の曲屋を連想させる建物である。聞くところによると民家を移したとのことであるが、何にしても凝った造りは何処か室町の臭を残している。静かな美しい周囲の環境も引立てる大切な要素であることはいうまでもない。

それはともかく座敷に通されて留守番の老夫婦から歓待をうけた。慣れぬ手付きで出された抹茶は本当に美味しく、今でも忘れることが出来ない。いつか有名なGさんとコーヒを飲んだとき、Gさんから玉露の飲み方を講釈された。玉露は清甘苦と飲む。

つまり最初の一杯は清、次は甘を味わうように飲むのだそうである。成程そういうものかと感心した。しかしこの時の茶は、唯の一杯が清甘苦であり、いやそれ以上のものではなかった。

ふと眼をそらすと裏庭に美しい書院がある。これは故大島大僧正住職時代に作られたもので、住職も檀家もないこの寺に放置しておくのは勿体ない。都会にあればとつくづく羨しくなった。

こんなことを考えているうちに藪蚊の来襲をうけ、一日三往復しかないバスの時間が近づいて来た。慌てて神風バスの停留所についた時には、夏の陽が近江の山に沈まんとする頃であった。ところが大変なことをしてしまった。というのは大切な天照仏を忘れて見ないでしまった。残念この上もなかったが、再度訪問のチャンスを与えて下さったのだと思いい、暮色の金勝を後にバスの中で目を閉じた。

× × ×

二十数年にわたって「浄土」を愛され、「浄土」に珠玉の名篇を寄せてくださった吉田先生が亡くなられてから、早いもので、去る四月二十一日は、三回忌であった。

その前日の二十日には多摩霊園で句碑の除幕式が行われた。句碑は吉田家の墓所から少し離れた地に立てられて、

白萩のこぼれて小さき仏かな 絃二郎
と刻まれてある。

三回忌当日は本郷池の端の講安寺（池田立基師）で、親戚知己六十人ほどが招かれて、法要が営まれた。

舞楽「蘭陵王」に始まって、「二絃院

索誓」の法名にゆかりのある仕舞、

小鳥の放生会を折り込んだ池田師の構想になる荘嚴な法会が勤められた。

二十二日から二十七日までは、「吉田絃二郎友の会」の主催で、日本橋三越で、遺墨展が催された。数十点の遺墨が展覧されたが、今、改めて遺墨筆跡の前に立って、先生の清純な思想を自然への熱愛とに接して、先生を目のあたり見る思いがして追慕の情

を新にしたのである。出展の作には、筆跡、

書簡、色紙、絵画、原稿などいろいろあったが、特に目を惹いたのは淡彩の墨絵であって、およそ十点あって、昭和十五、六年頃の作で、見事な出来栄である。題材は「あやめ」「玉蜀黍」「多摩川」「牡丹」など、先生の愛した花や風景である。いずれも中根駒十郎さん（当時新潮社支配人）の所蔵である。先生

吉田絃二郎先生の

三回忌と遺墨展

の著作集を出すときに、中根さんなどの勧めで、自画自装することになって、描かれたのであるが、この絵を描いている間は、全くの三昧境に入っていた、と先生は「装釘の辞」の中で書いておられる。

今度の展観で初めて見たのであるけれども、和紙の画帖が出陳されていた。毛筆で花や風景を克明にスケッチしてある。毛筆の美しい

線である。毛筆のスケッチは一本勝負みたいなもので、一点一面に全精神を打ち込む基礎的な勉強があったから、あれだけの作が描けたのである。いいものの書けたのは、しっかりした勉強があったからだ。書が数軸出ていた。

小鳥よ来れ、わが園に、亦き木の実あり、
啄みて朝の歌をうたへ、
という句も親しい。

何でもない人生、年々歳々相同じき人生、しかしその何でもない人生の静けさ影の深さ、それを感じる人でなければ、真実に生きたとはいはれない、
という人生訓を読んでいると、先生と対坐しているときの記憶がまざまざとよみがえってきた。

伊藤穉一氏ら先生の芸術を愛好し先生を追慕する人達で「吉田絃二郎友の会」ができた。時々会合を開いたり会報を発行した

が、今、改めて遺墨筆跡の前に立って、先生の清純な思想を自然への熱愛とに接して、先生を目のあたり見る思いがして追慕の情



法然上人の言葉

—(第三回)—

増 谷 文 雄

一、浄土宗安心起行の事。義なきを義とし、様なきを様とす。浅きは深きなり。只南無阿弥陀仏と申せば、十悪五逆も、三宝滅尽の時の衆生も、一期に一度善心なきものも、決定往生遂るなり。釈迦弥陀を証とす。

この一句は、知恩院に蔵するところの「護念經」の奥書に見える。建暦二年（一一二二）正月二日の日付があつて、源空と署名されている。知らるる通り、この上人は、おなじ年の正月二十五日、八十歳をもって亡くなれたのであるから、この奥書の一句は、その死の直前のものであった。

「勅修御伝」のしるすところによれば、この正月の二日から、上人は、食事がすすまぬための疲労が、急に増してきたように思はれたとある。また、この日以後は、

「更に余言をまじえず、ひとへに往生の事を談じ、高聲の念仏たえずして、睡眠の時にも舌口とこしなへにうごく」

がごとくであつたとも記されてある。（第三十七巻参照）思うに、この師は、そのころすでに最後の時のちかいことを自覺しておられたるに相違あるまい。

もし然るとするならば、この師もまた、年来おしえきつた念仏のおしえについて、わがなき後の邪義異端をあらしめないために、最後の言葉をのこしておきたい意志をもたれたに相違あるまいと思われる。それについて思い合せられるのは、かの釈迦牟尼世尊における「遊行經」のことである。かの經は、いうまでもないが、かの師の最後の旅路における言行をしるしたものである。その言行は、それ

までの四十五年の伝道説法のそれと、いささか異った気合
いが感ぜられる。その異なりは何であるかといはば、かの
師もその時、すでに最後の時のちかきを思い、滅後の弟子
たちのうえを思うて、はっきりとした最後の総結のことば
を打ち出そうとしておられたからである。それが、ほかの
諸経にみられぬ「遊行経」の価値をなしているのである。

いま、この師もまた、四十年になんなんとする永年の念仏
勤化のいとなみを、ここに閉じようとしておられる。その
おしえは、単純であればあるほど、その受けとり方は微妙
をきわめる。すでに、これまでに、いろいろの異端邪義
がおこっている。わが滅後のことを思えば、重ねてはつき
りと、この宗のあり方について最後の言葉をのこしておき
たいと思うのは、当然のことであった。

その機会に、勢観房源智によつてもたらされた。いわゆ
る「一枚起請」の製作がそれであった。この師の最後の日
もとおくはあるまいと考えた勢観房は申しあげて言った。

「念仏の安心、年来御教誡にあづかるといへども、なを
御自筆に肝要の御所存、一ふうであそばされて、たまは
りて、のちの御かた見にそなへ侍らん」

勢観房源智(一一八三—一二三八)は、平重盛の孫にあた
る人である。平家の滅亡ののち、世をはばかって出家し、

法然のもとに常随給仕すること十八年におよんだ。百万辺
の開基である。この人の希望にこたえて、この師が病床に
みずから筆をとって一紙にしたためたのが、かの「一枚起
請」の文である。その製作は、黒谷の金戒光明寺の蔵本に
よれば、建暦二年正月二十三日となっている。なくなられ
た二日まえのことである。

「一枚起請」の内容は、その後文にいうがごとく、「浄
土宗の安心起行」について、それは、まったく別義あるも
のではなく、ただ念仏を申せば往生するのだと信じて念仏
をもうす。それだけのことであると切言しているのである
が、いま、ここに挙げた「護念経」の奥書にみえる一句も
また、いろいろの意味において、かの「一枚起請」に比し
て言うべきものであらうかと考えられる。

第一には、この一節もまた、わが亡きのちの異解異義を
おもい煩うて、この本願念仏のおしえについての総結の言
葉をのこそうとする。この師の一つのこころみであったと
思われる。第二には、これもまた、「浄土宗の安心起行」
の肝要は、つまるところ、「ただ南無阿弥陀仏と申せば、」
誰でもが「決定往生遂ぐる」という外にはないと切言して
いる。それも、かの「一枚起請」では、観念の念仏でもな
い、学問して申す念仏でもない、三心四修などということ

も別にとり立てて言わなくとも、ちゃんとその中にこもっているのだと、いろいろの角度から、さまざまの要素をけずりおとして、ただ「信じて念仏する」という単純性の確立をはかっているのであるが、いま、この「護念経」の奥書の一節は、それを「義なきを義とす」という一句で表現しようとしているのである。

「義なきを義とす」とか、「無義をもて義とす」とかいう言い方は、今日では、かえって親鸞のことばとしてよく知られている。かの「歎異抄」の第一〇段には、

「念仏には、無義をもて義とす。不可称、不可説、不可思議のゆへにと、おほせさふらひき」といふ、よく知られた一節がある。浄土真宗の学者たちは、第一〇段のここまでを、筆者であると思われる唯円が、親鸞のことばをつづったものと考えている。それを「大切の証文」として、それ以下において、筆者はみずから異義批判を展開するのだと考えるのである。そうすると、ここに、念仏には、無義をもて義とす……と仰せられたという、その仰せられたのは誰であるか。それは法然ではないか。

そういえば、かの「末燈抄」のなかにも、親鸞は四力処にわたって「義なきを義とす」という言葉をとりあげてい

るが、それらの四力処のうち二カ処では、彼はあきらかに、それが法然の仰せであったと語っている。また、ほかの二カ処でも、そのことをほのめかす言葉がもちいられている。たとえば、「末燈抄」の第二書、「かさまの念仏者」では、

「如来の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと、聖人のおほせごとにてありき。」

と記しているし、第七書、「諸係等同と云事」においては、

「しかれば、如来の誓願には、義なきを義とすとは、大師聖人のおほせに候き」と書いてある。それらの箇所でも、ただ「聖人」もしくは「大師聖人」とあって、法然の名はないけれども、それが法然であることはすこしも疑う余地はないのである。さらに、おなじ抄の第五書「自然法爾事」においては、「自然」を解釈し、「法爾」を解説して、

「このゆへに義なきを義としるべしとなり。」

とあり、また、第九書の「誓於名号同一事」においては、

「他力には義なきを義とはまふしさふらふなり。」

とある。そこにも、「義なき義」というのは、自分の意

見ではなくて、仰せ聞かされたものであることが、文のあやのなかに語られている。何びとによって仰せ聞かされたか。それは、いうまでもなく、法然によってである。そのように、この本願念仏のおしえの、基本的な問題のことにすると、それは師の法然のおおせであったと附け加えることを忘れないのが、親鸞のいわゆる「偏依法然」の態度のあらわれであった。

だが、親鸞がそのように好んで用いた「義なきを義とす」という表現は、法然にあっては、これまでの文献にかぎり、あまり用いられていないようである。法然の好んで用いられた表現は、

「念仏はまたく風情^{ふぜい}もなし。ただ申より外の事なし。」

（勅修御伝、第二一卷）

とか、あるいは、

「念仏には、またく別の様なし、ただ申せば極楽へむまると知て、心をいたして申せはまいるなり。」（上人つねに仰られける御詞）

とか、あるいは、

「念仏を申させ給はんには、必をつねにかけ、口にわすれず唱^{となう}るが、めでたきことにて候なり。」（津戸三郎へつかはす御返事）

とか、またあるいは、沙弥随蓮がある人に語ったという言葉には、

「故上人は、念仏は様なきをやうとす。ただひらに仏語を信じて念仏すれば、往生するなりとて、またく三心のことを仰られざりきと。」（勅修御伝、第二〇巻）

と見えているが、ここには、「様なきを様とす」と、「護念経」奥書の一句におなじ表現をもって語られていることが注目せられる。

いったい、「義なきを義とす」という表現は、「様なきを様とす」とか、「またく風情もなし」とか、あるいは、「またく別の様なし」とかいう表現にくらべると、いささか理屈っぽい表現である。親鸞の解釈によれば、

「義ということは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば義といふなり。他力は本願を信樂して往生必定なるゆへに義なしとなり。」（末燈抄第二書）

とある。自己のはからいを挿^ささまないで受けとる。それが「義なきの義」ということであるというのである。人間の論理や理屈で受けとろうとしても駄目であるというのである。それを理屈づけようとするところから、さまざまの異解、異議が生れてくるというのである。だが、そのような理屈づけを排するのには、義のないのが義であるという言

い方は、理屈のことばをもって理屈をしりぞけているのではなからうか。

その点からすると、「様なきを様とす」とか、「まったく風情もなし」とかいう法然の言葉は、もっと実際的な立場からする表現であって、この道のおしえとして、まことに相応しいものであろう。だが、ひるがえって、私どもの住むいまの時代は、どの時代よりも理屈っぽい時代である。「まったく風情もなし」とか、「様なきを様とす」とかで、なにか物足らぬ思いがのこるのは、わたしどもがこの時代にすむ人間だからなのであろう。それよりも、親鸞のすきな「義なきを義とす」というような理屈っぽい表現にひかれるのは、わたしども自身が理屈っぽくなっているからなのであろう。

そのようわたしどもは、いまここに、法然その人のことばとして、「護念経」のおく書のなかに、

「義なきを義とし、様なきを様とす。浅きは深きなり。」
という一節を見出して、これでこそと、つよく心引かれる思いがある。理屈っぽい時代の子であるからである。

(東京外国語大学教授)

聖句

○ばずる心なく、鳥のようにあつかましく
他を傷けてかえりみるところのない人の
生活はなしやすい。

○はずる心があり、敬いを知り、執着を離
れ、清らに行い、智慧明らかな人の生
活は、なしがたい。

○空には跡がなく、邪の教えには悟りなく
あらゆるものには常住がない、そして悟
りの人には動揺がない。

(新訳仏教聖典より)

浄土歌壇

岩野喜久代選



天

静岡 小野 徳司

春となり桃くれないに桜咲きやがてわが婢の齒も痛むべし

評 桃くれないに桜咲きと、疊みかけた艶色が四句五句で急転直下、女中さんの歯痛に変化する。春は病もまた萌える季を面白くよんだものである。

地

東京 平川 梅路

人間に少し悲しみ有つはよしとへば花にかをりあるごと

評 花に香りなきは物足らず、人も悲しいみありて人生を見る眼を味い深くする

人

島根 渡辺 緑子

働ける母の乳房は胸に枯れ子等は育ちて山春となる

評 子のために母は何物をも犠牲にして悔いない。子の成長した時、労働に過勞に消耗つくした母の体は枯木に以てしまふ。

東京 二宮 綾子

まれに来て共に住まんと子の云へばまた忘らるる百の我まま

福岡 同部 キヨ

ここも痛しかしこも痛し熱もあり精一杯の抵抗はこれ

東京 紫藤 よね子

喰み捨し林檎の色にあかくなり寒に打たれし白き木蓮

神奈川 長野 文子

夜更けて一人ベットに明日切らるる左の乳房さぐりても見る

東京 青山 なを

忿怒像の世にあるゆえにいきづきぬいきどほろしも暗愚頑愚に

神奈川 能 坂 満

むしあつきかの新潟の御堂にて過せし男ばかりなる夏

青森 向井 きつ

夢のわれセーラー服にネクタイを風になびかせ春野にぞ立つ

東京 葛岡 利子

ゆりかごの百日の子よ目鼻立ち君をうつしてすやすや眠る

兵庫 野口 かずえ

嫁くことに心定めて対ふ夜の親娘

の面をてらすともし火

神奈川 張山 はるみ

夕ざくら吹雪もやみてうぐひすの花をめぐりて去りやらぬ庭

鹿児島 串岡 君江

ぼたん雪ふりくる中をみ仏に供へんと庭の菜の花をつむ

東京 川辺 つぎ

枯枝をくべしかまどはあたたかし電気釜見て帰り来たれど

東京 多田 勲

逃ぐるごと日は重りて桜咲き祖母の百日間近くなれり

東京 菊地 義夫

下りたちて久慈の川原の小石手に少年の日をなつかしむかな

神奈川 加藤 栄造

わが説を容れて相手の黙するとき寂しきかげのふと過ぎりけり

福岡 吉米 林堂

庭清め苔むす岩に坐して見る牡丹の花の朝の風情を

静岡 洗 醜 隠人

開病の友なぐさむと達磨の絵かきそめてより十とせ経にけり

神奈川 中里 史子

大寺の辛夷の花のま白にぞ花傘めきぬ彼岸会の今日

鹿児島 長崎 恒子

去りがてに仰ぎ見まもるみ仏のおん眼かすかにまばたきますや

函館 土井 タキ

かれこれと人の話にあづからでわれてふものを真空に置く

石川 神徳 喜一

鳶口を手にする男をんならが丸太荷積みす朝のはとばに

大阪 山村 阿也

峰々の雪と見てしが風立てば花吹雪に舞ふ鳥なく坂に

名古屋 堀江 真鯉夫

あと七日八十八夜の鳳来寺季をたがへずに啼く仏法僧

今戸 大 口 善信

ひよどりの仕業なるらし甘藍の全き葉のなき山ぎはの畑

東京 上野 つねや

世田ヶ谷の丘に小川に残る野趣共に探りし君よ今亡じ

富山 岡 理一

雪半ば残りし溪の近ければ春の炬燵も楽しきものぞ

富山 竹上 盛南

七回忌父のみ霊にたてまつる玉露はどよしほめ給ひなむ

新規会員

和歌山県	石井 繁殿
三重県	中村 かね殿
静岡県	望月 保正殿
"	浅井 善城殿
茨城県	一向 寺殿
大分県	岩橋 法雄殿
横浜市	天然 寺殿
佐賀市	阿弥 陀寺殿
青森市	浄 信 寺殿
千葉市	黒田 賢雄殿
佐賀県	佐々木竜雄殿
沖 縄	平範 夫殿
台東区	泰 寿 院殿
神奈川県	滝川 秀定殿
青森県	善 導 寺殿
京都府	水谷 幸正殿
北海道	大 乗 寺殿
津 市	中川 しな殿
津 市	片岡もと子殿
(以上二名)	前田繁子氏紹介)
名古屋市	山中 伴三殿

"	浜村 四郎殿
"	山口 義治殿
"	小川 清殿
"	成瀬美代子殿
"	平井 一信殿
"	榎村 吉亮殿
"	三宅 一郎殿
(以上八名、山田順証氏紹介)	

支部結成

台東区	西福寺 成田良穂殿
福井県	善導寺 大門俊我殿

右に新規御申込みの尊名を列記して、お礼と致します。

本誌の紙面拡充、内容刷新をはかりましたところ、読者諸賢には絶大の御協力をいただき有り難うございました。

今後ますます専念努力し、本誌の真価を発揚せしめ、皆様の御愛顧にむくゆる存念でございます。

会員だより

○創刊号から拝見しています。
「浄土」紙面充実して毎月の到着を待っています。新興宗教特に当地では日蓮正宗なるもの蔓延しておる折柄、わが浄土の興隆せられ内容の充実せられることは、誠にうれしいことと存じます。

山形市銅町迎接寺

江ノ目良円

○「前金切」のおしるしがついて来ないので送金を怠り、すみません。表記は二年分です。よろしく穴埋を願います。

小生、大正大学講師時代教務課の方の御縁で貴誌を知り、継続しています。目下小生は専修大学教授、英語担任です。英語の教師でもこういう読み物を好む人もあり、此頃の御編集の発達を喜びます。

東京 小山桂一郎

「浄土」購読規定

一部定価 金四十円

(送料四円)

会費 金 四八〇円

(送料不要)

浄土 五月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可

昭和三十三年五月廿五日 印刷
昭和三十三年六月一日 発行

〔定価四十円〕

編集人 竹 中 信 常

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 大 橋 貞 雄

印刷所 共同印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人遺仰会

振替東京八二二八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

解説増谷文雄 画井上与志夫 詩 島田きんや

保育ののさま

B 5判 七色刷 美本
定価 八〇円 一六六円
(十部以上七〇円(下実費))

この本は、宗祖 法然上人のご生涯とご教旨を、少年少女にわかりやすく、親しみやすい形で描きだしたものです。内容は、国宝「勅修御伝」によったものであります。

指導 外語教授 増谷文雄 画 中村ひろし
監修 東大正大講師

教育 法然さま

B 5判 一〇四頁
定価 一三〇円 二二四円
(十部以上一〇〇円(下実費))

うつくしい絵と、やさしい童謡とで、仏の世界のイメージをおさな心の中に、植えつけるようにつとめ、お母さま方のために、それぞれの絵に解説をつけました。

若い世代の人々のために!!

大正大学教授
竹中信常著

宗教心理の研究

A 五判 五九〇頁
定価 一二〇〇円 二二四円
(十部以上一〇〇円(下実費))

宗教が現代人の心理にどのように受けとられているかということ、古来の学説更に即して説明すると共に、信仰の心理、靈感の心理、宗感心等をテーマとしてとり上げている。宗教を理解し、信仰を他に伝えんとする者にとって必読の書である。

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

発行所 青山書院

振替東京 九九三〇三番

東京都品川区上大崎一丁目七八二

取扱 法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

浄土寺院必読の書 増版

仏教大学教授坪井俊映著

浄土三部経概説 全

A 5上質紙・特製本
三段組・六三五頁
定価 一、二〇〇円

初版たちまち売切れ!

仏書のベストセラーはこれだ!

浄土三部経を最も判り易く解説

した本書を ぜひ

毎日新聞評 この経典は浄

土門の提所となるもの。

浄土宗義を明らかにする

目的で綿密に注釈、解説

が行われている。

常盤大定 監修

B 6各四三〇頁余 総ルビ

仏典説話全集全十二巻 特価 三、六〇〇円
(送料共)

御希望に依り第三巻及第七巻増刷して全十二巻を揃えましたからお申込下さい。なお分冊売りはしません。

高橋良和著

影絵 法然さま 価九〇円
物語 一六六円

法然上人の御一代記を美しい
影絵によって物語る二色刷の
影絵絵本

話 児童 幼

日本図書館協会選定図書
高橋良和・小関尚之・
山田巖雄他著

星の花 価一八〇円
二四四円

すぐその儘お話に使えるお
話の台本

発行所 隆文館

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十三年五月二十五日印刷 昭和三十三年六月一日発行

浄土

第二十四卷

第六号

定価金四拾圓(送料四圓)

◆◆信仰の歩みを進めるために◆◆

新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円二八円

目次

- 1. 大慈悲の仏教
- 2. 知性を超えて
- 3. 美的情感を超えて
- 4. 本願の不思議にて
- 5. すべてを包む愛
- 6. 人生は信ずる心から
- 7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版 三十一頁
定価二十円二八円

目次

- 1. 馬に水を飲ませるもの
- 2. 流れゆくもの
- 3. なやみとまよいのもと
- 4. すでに救はれている
- 5. 信ずるころ
- 6. 仏を思う
- 7. 新しい生活
- 8. 美はしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

値段改正中 材料値上りの為お値段は下記の一・二割高です

鎖ブランコ 2人乗	Y 13,000
鎖ブランコ 3人乗	Y 15,000
鎖ブランコ 4人乗	Y 22,000
鎖ブランコ 6人乗	Y 26,000
椅子ブランコ 4人掛	Y 13,500
太鼓橋	Y 10,000
ジャングルジム 中型	Y 28,000
単式滑台 中型	Y 23,000
複式滑台 中型	Y 36,500
動物付き遊動木	Y 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達実費(都内横浜 500 円以内
其他1000円以内)組立無料。
小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費当社・送料着払)
組立説明書送付



篠沢鉄工所

東京都大田区堤方町718
電(75)1024(池上駅東3分)

幼稚園 保育園 運動遊具

全国幼稚園・保育園・小学校・各団体に、良品を廉価にのモ
ットーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。